

---

# 真・乙女ゲーマー佳耶

森石乙二

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・乙女ゲームー佳耶

### 【Nコード】

N96300

### 【作者名】

森石乙二

### 【あらすじ】

ギャルゲー大好き少女佳耶。二次元の女の子以外に興味のない彼女は、突然現れた「オタ女」の穂瑞と「自称・天才ディベロッパ」のロミオの頼みで自作の乙女ゲームをやらされる羽目になってしまう。

だがその乙女ゲームはただのゲームではなく……

リアルとバーチャルで繰り広げられる真・恋愛ゲーム物語。

## 佳耶と謎の二人 - 1 (前書き)

この物語はフィクションです。

登場人物、場所、出来事はすべて架空のものです。

二次元の人間は三次元では存在しません。

少年は走る。愛する少女が待つているだろう丘の上へ。愛を誓った二人が永遠に結ばれると言われる伝説の木が立つ丘へ。

不安はなかった。少女に好かれるために様々な努力をしてきたのだから。どんな障害にも、試練にも負けなかった。彼女に愛されるのなら嫌われ者になることも出来た。

胸が高鳴る。

走ったせいだ。

否。

思い続けていた少女に会えるからだ。

手に滲んだ汗を何度も拭う。高まる想いだけが先へ先へと急ぐ。

「もうすぐ」

焦る気持ちを抑えてじつと前を見つめる。

丘の上に辿り着いた時、見覚えのある長い髪の後ろ姿がぼんやりと視界に入る。

「いた」

間違いない、彼女だ。

少女はこちらに振り向き、眩しいくらい美しい少女の笑顔をこちらに向ける。

来てくれたんだね。

よそ風のような優しい声が耳に入る。その瞬間確信した。自分の勝利を。

「よしきた！ 百子エンディングきた！」

歓喜の雄叫びをあげながら佳耶は手の中のゲーム機PPB（Play Play Board）のボタンを押し続けた。主人公の少年と画面の中で微笑む百子に至福の眼差しを向ける。

この二人は伝説の木下で愛を誓って幸せだろう。だが佳耶はそんな二人よりもっと幸せだった。なにせフラグの立て方がわからず口

ードを数十回、バッドエンディングを四回も繰り返した後のハッピーエンドなのだから。

細かく鼓動を刻む心臓も、弛んでしまった口も暫く戻りそうになり。

この気持ちを一秒でも早く誰かに伝えたい。そう思った佳耶は結ばれた二人を見守りながら急ぎパソコンのスイッチを入れた。穏やかな気持ちになれる心地よいエンディング曲を口ずさみながらインターネットを起動させ、お気に入りサイト『女性ギャルゲームの集い』に繋ぐ。

『女性ギャルゲームの集い』はその名の通り女性でありながらギャルゲーを愛する人たちが集うホームページだ。住む地域や年齢は違えど、ここに集まれば皆一人のギャルゲーム者として好きな女の子の話題や攻略情報の交換で盛り上がる。更に掲示板には連日誰かしらゲームのクリア報告や様々な情報を書き込んでいた。佳耶も当然その中の一人だ。

佳耶は掲示板に今の気持ちを軽やかにキーボードを打ちながら伝える。

「『君と約束の丘で』百子エンディングクリア！ ラスボスとまで言われた彼女を攻略情報なしでクリアしましたよ」

まずはゲームをクリアしたことを報告する。そしてもう一つ重要なことを伝える。

「なんとこれで私が攻略した女の子が千人目となりました！」

佳耶がギャルゲーに手を出してから約二年後、遂にエンディングを迎えた女の子が千人を超えた。その記念すべき千人目が慣れた男性ユーザーからも手強い相手と言われていた『君と約束の丘で』の百子だったのだから嬉しさは二倍だ。

長年かけて集めたゲームがずらりと並ぶ木製の棚を眺めると、頭にぼんやりと二年前の事が浮かんでくる。

二年前の元旦。近所のゲームショップで売られていた福袋。当時やることもなく退屈していたせいもありなんとなくそれを買ってし

まった。それが全ての始まりだった。

袋に入っていたのはどれもつまらないで有名か、話題にもならなかったゲームばかりだった。福袋を口実に要は在庫処分をしたかったのだろう。だがそんなことは佳耶には関係のない事で、暇つぶしになれば何でもよかった。文句を言うつもりは微塵もない。

その数あるゲームの中で佳耶の目を惹いたものがあつた。それこそ彼女をこの世界に引き込んだ要因とも言えるギャルゲー。タイトルは『空色の海で』。今までギャルゲーという物とは無縁の生活をしてきた佳耶にとってこれは未知との遭遇に等しかった。二次元の女の子が印刷されたパッケージを見つめていると段々胸が苦しくなっていく。それが何故なのかわからない。だが一つだけわかることがあつた。パッケージに描かれている少女に会ってみたいという気持ちが芽生えていたことだ。気がつけばケースを覆うビニールカバーを破り捨て、説明書も読まずにゲームを起動していた。

画面の向こうの少女は屈託のない笑顔でこちらに話しかけ、時には怒り、時には泣き、そして一途に自分を慕ってくれた。そんな少女に佳耶自身も惹かれていった。

こんな可愛い女の子はこの世には存在しない。わかっていても求めてしまう。

誰も止める者はなく、佳耶はそれ以後さまざまな女の子達と出会うためにギャルゲーをプレイし続けた。そして今に至る。

ギャルゲームー佳耶は人差し指で机を叩きながら書き込みの反応を今か今かと待つ。試しに何度か更新ボタンを押してみるが画面は変わらない。

ゲームのエンディング曲はもう終盤に差し掛かっていた。

仕方がない、諦めて静かに曲が終わるのを待とう。そう思った矢先、携帯が着信音と共に踊りだす。突然の遠方からの知らせに慌ててPPPBを手放して携帯を手取る。

画面には「柚子」の文字。どうやら柚子からメールが着たらしい。

『明日は大切な日なんだから絶対に休むなよお姉さん。それと夜更かしはお肌に悪いよ〜』

明日……

メールの内容と、部屋が無音になったことで佳耶はふと我に返った。

曲が終わったゲームの画面を見つめ、淡々とクリアデータをセーブするとそのままPPBの電源を切った。

画面が暗くなった瞬間、不思議と急に瞼が重くなる。

時計に目をやると二十三時過ぎを指していた。これ以上起きていたら明日に支障が出てしまう可能性がある。それだけはなんとしても避けたい。

掲示板への返事が気になるがそのままパソコンの電源も落とす。

柚子には

『了解』

の一言を返信する。メールの内容が長かるうが短かるうが柚子は文句を言わない。

ベッドの中にもぐり込み目を閉じる。

明日は大切な日。

佳耶の今までゲームに向いていた心は来るべき未来へ向き、そのまま深い眠りに誘われる。

## 佳耶と謎の二人 - 2 (前書き)

この物語はフィクションです。

登場人物、場所、出来事はすべて架空のものです。

二次元の人間は三次元では存在しません。



月曜日の学校というものは憂鬱で気分が滅入ってしまふことが多いが、今日を気持ちよく迎えることができたのは昨夜メールを送ってくれた柚子のお陰だろう。

外は雲一つ無い快晴。ドアを開けて外に出ると爽やかな秋風に体が包まれる。

「いつも言ってるけど走る時は気をつけなさいよ」

自転車のチェーンをはずす佳耶に腕組みをした母が注意を促す。この言葉は耳にたこができる程聞いている。高校に入学し、自転車登校すると言った日から毎日だ。最初の内はうんざりしていたが、曲がり角で小学生と衝突事故を起こしそうになった時からはきちんと聞くようになった。今では毎日忙しい中、これを言うために時間を割いてくれていることに感謝している。

「わかってます。そうだ、今日は委員会の仕事があるから帰り遅くなるね」

前カゴに鞆を押し込むとサドルにまたがり、ペダルに足を乗せる。「それじゃあ、行ってくるね」

「行ってらっしゃい。帰りも気をつけるのよ」  
見送る母に手を振り、強くペダルを踏み出発する。

この時間帯は小学生の登校時間と重なっているため慎重にこがなくてはならない。特に曲がり角が要注意ポイントで、ここでスピードを出すと大事故を起こしかねない。小学生とぶつかりそうになった時は本当に心臓が筋肉と皮膚を突き破って出てきそうだった。お互い怪我一つ無かったことは不幸中の幸いと言える。それ以後はどんなに急いでも必ず止まり、左右を確認してから走るよう心がけている。周りからは「心配性」と言われるが、自分が気をつけることで誰かが傷つくのを防ぐことができるのなら構わない。

「あ、ゲーム姉ちゃんだ」

曲がり角から現れた小学生が佳耶を指さす。

誰が流したのかは知らないが、佳耶のゲーム好きは子供達の間で有名になっていた。気がつけば「ゲーム姉ちゃん」というあだ名まで付けられている始末である。

少年に軽く手を振ると、嬉しそうに自転車に駆け寄ってきた。

「ゲーム姉ちゃんまた一緒に『ナイクエ』やろうぜ」

『ナイクエ』（ナイトクエストの略）はハンテンドール専用RPGだ。シリーズ第一弾は佳耶が生まれる前に発売されており、今でもその人気は衰えていない。昔は一人プレイが当たり前だったが、今では通信機能を使って複数人でプレイすることが出来る。

ゲームが出た当初は他のゲームに夢中で全く興味がなかった。だが近所の小学生達が勝手に持っているものと勘違いし、会う度協力プレイを要求されていた。彼らの期待を裏切るわけにもいかずこっそり本体ごとソフトを買い、やり込んでいるという証明するために何日も徹夜でプレイし続けた。お陰で極度の寝不足になったが、子供達と楽しくゲームが出来るようになったことでよしとした。

「よし、今度一緒にやろうか」

「やった！ 約束な。絶対だからな」

少年は目を輝かせながら小さな小指を立てる。

「わたしの座右の銘は『どんな約束でも絶対に守る』だから安心しなさい」

彼の小指に自分の小指を交差させて指切りの約束をする。

少年は佳耶の言葉に安心したのか、無邪気に笑いながら走り去っていった。その小さな後ろ姿が見えなくなると、佳耶も再び自転車を走らせた。

死角の多い住宅街を抜けると店が建ち並ぶ大きな道路に出る。ここは車道さえ走っていればスピードを出してもさほど危険ではない比較的安全な道だ。先ほど立ち止まった時間を取り戻すように力の限りペダルを踏む。少年と親交を深めることは大事だが、遅刻だけはどんな理由があってもしたくない。その一心で走り続ける。

だが、ある場所が近づくとブレーキをかけてスピードを落とす。そして自転車を降りて車道から歩道に移動する。

ここは駅近くの横断歩道で、電車を通っている生徒が使っただ。信号が変わるのが遅いせいで歩道は生徒で溢れかえっていた。

佳耶も自転車を押して集団に混じる。そしてじっくり集団を見回す。この瞬間が朝一番緊張する。

「今日はいるかな」

胸は期待と不安で高鳴り、ハンドルを握る手は緊張で汗が滲んでいる。そんな自分に落ち着けと繰り返し言い聞かせる。

集団全員の顔を確認し終わると、すつと強張っていた体の力が抜けた。世の中は個人の希望に簡単に応えてくれる程甘くはないようだ。

佳耶は視線を向かいの信号機に向ける。同時に信号は青に変わる。落ち込んでないで前に進めよ、と言われている気がして思わず口の端が上がる。

前の人に続き自転車を押す。だが、ブレーキをかけていないにもかかわらず前に進まない。力を込めてもびくともしない。それどころか後ろに引かれている気さえした。考えられる原因は一つ。誰かが故意に自転車を止めている。犯人はわかっている。いつも同じ人間だ。

「瑠音、リヤキャリア掴まされると進めないんだけど」

少し振り返り犯人に告げる。

「おはよう佳耶っち。今日も元気？」

瑠音は掴んでいたリヤキャリアから手を離し元気に挨拶をした。にこやかに笑う顔には反省の色は全くない様子だ。

「誰かさんに進行妨害されてちよつと不機嫌」

「それはどうも失礼しましたー」

軽やかな足取りで佳耶の前に移動する。今度は前から妨害する気かと少し身構えるが、瑠音はそのまま横断歩道を渡り始めた。

佳耶は小さくため息を吐き瑠璃に続く。

丁度近くのバス停にバスが到着し、そこから大勢の生徒が降りてくる。所謂「バス組」の登場だった。バス停と横断歩道はさほど離れてはいないが、少しでもバスから降り遅れると信号が赤に変わってしまい、次を待たなくてはならなくなる。なのでバス組は降りたらずぐ走る者が多い。急ぐ彼らにとっては自転車などの人間以外の障害物は邪魔としか言いようがない。

これは彼らの邪魔にならないよう早く歩く必要がある。

そう思った矢先、佳耶は突然後ろから妙なものを感じ足を止めた視線。

直感でそう判断した。

思い切って振り返ってみるが、後ろには急ぐバス組しかいない。皆、佳耶など無視して走っている。

「気のせい？」

疑いながら後ろを見つめる。一体今のはなんだっただのだろうか。

「佳耶っちなにやっつてんのさ！ 信号変わるよ！」

遠くから聞こえる瑠音の声に驚き、すぐさま信号機に目を移す。

青い光が点滅し始め、赤に変わろうとしていた。

手招きする彼女の姿を見て初めて自分がまだ横断歩道の途中にいたことに気づく。慌てて歩道を渡りきると、瑠音が心配そうに顔を覗き込んできた。

「どうしたのさ、ぼーっとしちゃって。寝不足？ ゲームのやり過ぎ？」

首を横に振って否定する。けれど変な視線を感じたとも言えず

「なんでもない」

そう答えるしかなかった。

歩道の反対側にはバスから降り遅れたバス組と、新に駅から降りてきた生徒が立っていた。彼らを凝視するも先ほどの怪しい視線は返ってこない。彼らの中にはいないようだ。

「佳耶っち置いてくよ」

瑠音が呼ぶ。

「うん、今行く」

少し後ろを気にしながら佳耶は瑠音の後を歩き始める。

横断歩道で合流した後はいつも瑠音が前、佳耶が後ろに並んで歩く。彼女の足を前輪で傷つけないよう少し距離を置いて歩くが、瑠音は何故か歩く速度を急に速めたり遅めたりするのでその調節が難しい。少しは神経を使うこっちの身にもなってもらいたいものだ。

「で、今日は例の彼に会えた？」

彼女の質問に一瞬息が止まる。

「いなかった」

「ありゃー。折角わざわざ駅前まで遠回りして通学してるのに残念だったね」

「みなまで言わないで、恥ずかしいから」

「もー！ 千人斬りを達成したギャルゲーマーが何を言うか！」

「……それも大声で言わないで」

瑠音のマイペースなところが時々困る。

「書き込み、ちゃんとレスしたから見てね」

小さなことを律儀に報告してくれるところは割と好きだったりもする。

「そう言えば、佳耶っちの書き込みの後に変な書き込みが投稿されてたんだよね」

「変なつて、どんな？」

「えつと……なんか思い出せないけど、それ見てすんごいむかついた記憶ならあるんだー」

小首をかしげているあたり、本当に思い出せないようだ。

変な書き込み。少し気になるが後で携帯で見ればわかるだろう。

「最近音ゲーの調子はどう？」

考えることが苦手な彼女の頭がショートする前に話題を変える。

「調子いいよ。でも最近、行きつけのゲーセンで変な女集団が音ゲー占拠してるんだよね。それもむかつく」

「一発言つてやればいいじゃん。出来るでしょ瑠音なら」

「言ったんだけどさー……そいつら変だったからこれ以上関わりたくないんだよね。『ボクの聖域に近づかないでくれないか下郎』とか言っただよ！ 最悪でしょ！」

「流石にそれは関わりたくないかも」

彼女の話を聞くに、ネットといい、リアルといい、近頃はどうか変人が多いらしい。真つ向から言い捨てられた彼女に同情してしまふ。

そんな話をしている間に白い校舎が見えてくる。毎朝改装したての白い建物が近づくると今日も一日苦楽溢れる学校生活が始まるのだと自覚させられる。

「今日の授業で小テストやらされるんだよね。憂鬱」

消えそうな声で呟く瑠音の歩みが足枷が付いたかのように遅くなっていく。背は丸くなり、ただでさえ小さい体が余計小さく見える。猛獣に怯える小動物のような彼女になんと声をかけたらいいのか迷う。大のテスト嫌いな彼女を激励したところで何の意味もない。むしろ余計落ち込ませることになりかねない。

瑠音がぐるりとこちらに顔を向け、そして恨めしそうな目で佳耶を凝視する。

「佳耶っちはいいなー頭いいから」

また始まった、と佳耶は呆れる。これを言われるからこちらは何も言えなくなる。出てくるのはため息ばかりだ。

前を歩く生徒達が吸い込まれるように正門をくぐっていく中、佳耶は歩道を右に曲がる。駐輪場は裏門の方にあり、そこに行くには学校の外周を半周する必要がある。そこまでの道を使うのは自転車通学の生徒くらいしかない為、とたんに人が少なくなる。

唯一例外なのは瑠音くらいなもので、彼女は駐輪場まで付いてくる。クラスが違うせいで喋り足りない時があるかららしい。普段は楽しくていいのだが、今のような雰囲気になると気まずくしてしまう。がない。

何を話そうか考えを巡らせている間に裏門に付いてしまった。

瑠音に何も言えないまま駐輪場に自転車を駐める。

今まで自分の前を歩いてきた瑠音は今自分の後ろにいる。重たい空気が後ろから流れてくるのがわかる。こちらの気も滅入ってしまいうそだ。

前カゴの鞆を取り、俯き加減の彼女に向き合う。

「あのさ」

重たくなつた口を開く。

「わからないところがあるなら遠慮なく聞いて。その……それ以上瑠音が落ち込んでるところ見たくないから」

なんだか自分で言つて恥ずかしくなつた。一生懸命考えた結果思いついた励ましの言葉がこれしかなかったことに。思わず瑠音から目を逸らす。

すると突然両肩を掴まれ、瑠音に引き寄せられる。

「その言葉待つてた！」

瑠音は満面の笑みを浮かべ顔をあげた。その顔に、佳耶は初めて計られていたと気付く。してやられた。

「やっぱり佳耶っちはいい子だー」

彼女の笑顔は勉強をみてもらえる嬉しさからなのか、それとも佳耶の小恥ずかしい言動が愉快に思えたからなのか定かではない。

どちらにしろやりきれない敗北感だけが心に残った。

「ささ、教室行こう。教室。さっそく佳耶っちに色々教えてもらわなきゃ」

再び足取りが軽くなつた瑠音の姿にまたため息が出る。

この件に関しては諦めて、大人しく教室に向かおうとしたその時再び背筋を刺激するような視線を感じた。

急いで辺りを見回す。今度は横断歩道の時と違い近くにいる気がした。否、確実に近くにいる。

「やっぱり気のせいじゃない」

特に建物や木等の物陰に注意しながら視線の主を捜す。

先までは瑠音がいて気付かなかったが、この視線の主はずっと自

分を追っていたのかもしれない。

だが一体何のために。

冷や汗が額から流れる。

いざという時のために鞆の持ち手を力強く握る。そして暫くそのまま動かず相手の出方を待つ。

自転車を置きに来る生徒以外こちらに来る者はいない。だが視線はまだこちらに向かっていた。

こちらも動かず、相手も動かずでは埒があかない。

佳耶はきちんと靴を履いていることを確認し、思いつきり地面を蹴ってその場から駆けだした。もし走って相手が追いかけてきたとしたらどこか死角になるところで待ち伏せして捕まえる手がある。兎に角追いつかれないよう全力で走って振り切るしかない。生徒達が入っていく昇降口を横切り、校舎裏まで走る。今の自分が他の生徒にどう思われようと気にしている場合ではない。何か言われたら適当に弁解すればいいだけの話だ。今はただ走るのみ。

校舎の角を曲がり誰もいない校舎裏まで来ると、まだ黄色く色づいていない银杏の木の陰に隠れる。

その場にしゃがみ、呼吸を整えながら視覚と聴覚を研ぎ澄ませる。誰かが追ってきた様子もなければ、追ってくるような足音もしない。流石に追ってくるようなことはしなかったらしい。

解放されたことがわかり安堵する。

朝から全力疾走したことにより体力を消耗した佳耶は、木に寄り掛かり少し休憩することにした。

银杏の葉は秋風に揺れさらさらと心地よい音を奏でている。目を閉じるとそこは学校ではない何処か別の場所にいるような錯覚すら覚える。

例えばそう、『君と約束の丘で』の伝説の木の下にいるような。

もしここがそうだとしたら誰か自分に会いに来てくれるだろうか。来てくれるのなら彼がいい。彼が来てくれれば……

脳内を妄想がうごめく。



だがそんな妄想も学校中に響く予鈴の音によって一瞬でかき消される。

「嘘!？」

スカートに付いた土埃を払い佳耶は急いで校舎に向かった。

昇降口で慌ただしく靴を履き替えると、教室のある三階まで一気に階段を駆け上る。間に合えと何度も心の中で祈る。廊下を走り、2年B組の教室のドアを勢いよく開けた。それに驚いたクラスメイトが一斉にこちらに注目する。

そして神経質で有名な担任教師が一言。

「葉鍵、遅刻だ」

絶対に遅刻しない時間に来たはずにも関わらず遅刻という判決が下された。

やはり、世の中はそんなに甘くは出来ていないようだ。

佳耶と謎の二人 - 3 (前書き)

この物語はフィクションです。

登場人物、場所、出来事はすべて架空のものです。

二次元の人間は三次元では存在しません。

「では、ホームルームを終わりとする。各自授業の準備をするように」

担任教師はそう言い放つと足早に教室から出て行った。

彼から冷たい目で睨まれる時間が終わり、佳耶は机に突っ伏す。

こんなはずではなかったと後悔の念に苛まれる。

「佳耶が遅刻なんて珍しいね」

聞き慣れた可愛らしい声に顔を上げる。柚子が眉をハの字に下げ、心配そうにこちらの顔を覗き込んでいた。

柚子は童顔ではあるが全てのパーツが整っており、同性の自分も時々どきつとしてしまうことがある。特に今のように顔が目と鼻の先にある時がそうだ。体中の熱が全て顔に集中し始める。

「なにかあった？」

このシチュエーションは、もし自分が男だったらいちころに違いない。柚子がギャルゲーのヒロインだったら真っ先に攻略したい。

と、彼女の心配をよそに妙なことを考える。

「顔赤いよ大丈夫？」

彼女の言葉に目が覚める。

かっとな熱くなった頬を両手で強く叩き、熱を冷ます。

「顔は大丈夫。なんでもない。問題ない」

「そう。ならいいんだけど。体調が悪くて遅刻したんじゃないかって心配しちゃった」

ハの字だった柚子の眉が元の綺麗な弧の形に戻る。

「それで、どうして遅刻したの？」

彼女の質問に答えるべきか迷う。

朝から変な視線に追われ、その正体を探る計略を実行していたら遅れた。とはいくら相手が親友だったとしても言えない。どう考えても信じてもらえないだろう。

「別になんでもないって。ちょっと寝坊しただけ」  
笑って誤魔化する。

だが彼女の目は笑っていないかった。

「嘘。指が嘔吐してる」

「そんなまさか」

彼女の指摘に恐る恐る自分の指に目を落としてみる。指摘の通り、佳耶の指は動揺を隠しきれず口とは全く違うことをしていた。

佳耶は真剣に考え事をする時、何故か人差し指でその辺にある物を一定のリズムを刻みながら叩く癖が出る。無意識のうちにやってきた為、ずいぶん前に誰かに指摘されるまで一切気付かなかった。そして今も柚子に真実を言うべきか否か考えていたせいでその癖が出てしまっていたようだ。それも普段に比べて小刻みになっているので、動揺していることが完全に知られていると思われる。

とりあえず人差し指の動きを制止して考える。

本当のことを言うべきか迷っている場合ではない。これはもうそんなレベルの問題ではなくなっている。柚子はこちらが嘘を吐いていると確信しているのだからもうどんな誤魔化しもきかないだろう。そうなれば答えは一つ。

「あーえー……これは、ですね」

口の中が乾き、声がかすれる。どんなタイミングで切り出せばいいのかわからない。出てくる言葉を飲み込まないよう息を吐いて間を保たせる。

ちらりと柚子の顔を盗み見ると、今度は眉をつり上げて真剣な眼差しでこちらを見下ろしていた。

それが少し怖くなり、背中に嫌な汗が流れ出す。

「ごめんなさい、白状します。見知らぬ人につけ回されていたような気がして逃げてました」

警察に追い詰められた犯人のように小声で自白した。

「え！？ それでどうしたの！？ 大丈夫だったの！？」

佳耶の予想は大きく外れ、柚子は驚愕の色を隠さず興奮しながら

質問攻めをしてきた。

「つけられてたつてどんな風に!? 男の人だった!? 殺気!?  
それとも熱視線!?!」

まさかこんな反応が返ってくるとは思わず佳耶も愕然とした。柚子なら笑い話で済ませてくれると思ったがそうはいかなかったようだ。

珍しく柚子が興奮している様にクラスメイト達の注目が集まる。それも言っている内容が理解しがたいものなので、余計周りの興味を惹いていた。

これ以上事を大きくするわけにはいけないと判断し、佳耶はとっさに柚子の手を掴んで逃げるように教室から出て行った。そのまま教室から少し離れた階段の踊り場まで連れて行く。

教室に比べて踊り場は日が当たらないので十月でも肌寒い。だがのぼせている今は頭と顔が冷えて気持ちいいくらいだった。徐々に熱が引き、柚子の様子を窺う。柚子の方も顔から赤みが引き、落ち着きを取り戻したように見える。

佳耶はゆっくり深呼吸し、口を開く。

「驚かせてごめん」

「ううん。私の方こそ騒いじゃってごめんね」

次の授業時間まであまり時間がない為、手短に朝のことを話す。柚子は話し終わるまでずっと黙っていた。それから胸の前で腕を組んで何かを考えているような仕草をした。

「これは私の勝手な推測なんだけど」

柚子は探偵のように話を切り出した。

「佳耶って昔から色々が目立つことが多かったじゃない。だから結構変なところで変に有名になってるんじゃないかって。それで変なのにストーリーカーされてるとか」

彼女の言葉に心の中で何かが引っかかる。

「……わたしってそんなに目立つような変なことしてる?」

「うん」

即答だった。

簡単に過去を振り返ってみるが思い当たる節はない。彼女は一体なんのことを言っているのだろうか。尋ねたいが今その話は関係ないので後にすることにした。その方がゆっくり聞くことが出来る。「私色んな人から何か知らないか聞いてみるね。わかったらすぐ佳耶に連絡するから」

佳耶は袖子に両手をぐつと握られる。

「何があっても私が佳耶を守るからね」

曇りのない澄んだ瞳に見入ってしまう。

「う、うん。ありがとう」

彼女の迫力に佳耶はそうお礼を言うしかなかった。

このことが袖子の口から広められるのかと思うと、話して良かったのか悪かったのかわからなくなった。話したことを少し後悔する。「そろそろ戻ろうか」

一限目の時間も近づき、佳耶は袖子と教室に戻ることにした。

教室に戻った時、先ほどの件は一体何だったのかとクラスメイトに詰め寄られたらどうしようかと、また変な心配事をしてしまう。

「話は変わるけど、佳耶今日は図書委員会の仕事だよ。夏目君と袖子に振られた話題に、胸が飛び上がる。」

「夏目君来てたから仕事一緒に出来るね」

『夏目』という名前を聞くだけで体中に緊張が走る。先ほど冷めたはずの熱が再び温度を増して蘇る。

「そ、そうだね」

口の中は酷く乾き、更に心臓の動きが速すぎて胃の中の物が出てしまいそうだった。

「頑張れ佳耶！ 応援してるから」

先とは別人のような輝く笑顔の袖子に背中を叩かれる。本当に吐きそうだ。

佳耶は緊張による吐き気と戦いながら教室に戻った。

佳耶と謎の二人 - 4 (前書き)

この物語はフィクションです。

登場人物、場所、出来事はすべて架空のものです。

二次元の人間は三次元では存在しません。

退屈な六限目の授業が終わると待ちに待った放課後がやってくる。荷物をまとめると佳耶はぎこちない歩き方で図書室に向かう。

隣には

「佳耶一人じゃ無事に図書室まで行けるか心配だから」

と柚子が付き添っている。彼女には朝から世話になりっぱなしだ。いずれ何らかの形でこの恩は返さないといけない。

柚子がいてくれたお陰で無事図書室の前まで辿り着くことに成功した。だが次からのミッションは一人で遂行しなくてはならない。

流石に委員会の仕事まで彼女に手伝わせるわけにはいかないからだ。

「ここでお別れだ、友よ」

ゲームで聞いた台詞を大げさに言ってみる。

「なーに変なこと言ってるの。ささ、行った行った」

ゲームをやらない柚子にはこういった冗談は通じない。それどころか図書室のドアノブを握ったまま動けない佳耶の背中を強く叩いてさっさと行くよう催促してきた。

このドアを開けたら自分は今までの自分ではいられなくなる。毎週月曜日の放課後はその恐怖心に襲われる。

手は震え、唾と空気を何度も飲み込む。胃の中は飲み込んだ空気で一杯になり、今にも破裂しそうな程苦しい。

この先のことを考えて逃げ出したくなるが、柚子に後ろから両肩をがっちり掴まれているため逃げることは到底不可能だ。

「頑張れ。いつも通りにしてれば大丈夫だって」

「いつも通り……そうだね。いつも通り」

ドアノブを強く握り、そして回す。少し開いたドアの隙間から本独特の匂いが鼻腔をくすぐる。この匂いがいつもドアの向こうに足を踏み入れることを躊躇させる。

本が悪いのではない。図書室にいるある人物の存在がそうさせる



のだ。

このままドアを閉じてしまいたい。だが委員会の仕事を放棄することは絶対に出来ない。

「頑張り」

柚子の鼓舞に腹を据える。

意を決してドアを勢いよく開ける。

目の前には数多くの本が並ぶ本棚。そして木製の小さな受付カウンター。

佳耶はカウンターを見るなり全身に鳥肌が立った。徐々に顔は熱を帯び、足は床と縫い付けられたように動かなくなる。目はカウンター、ではなく、そこで受付の仕事をやっている人物に釘付けになる。

仕事をやっていると言ってもただそこに座って貸し出した本と返却された本を適当にチェックしているだけにすぎない。当人は手元の本を読むのに夢中だった。本の虫とは彼のためにある言葉だと断言できる。

夏目龍之介。2年D組。清潔感のある黒髪が魅力的な男子だ。その他特徴を挙げよと言われても、勉強も運動も中の上で、外見も全体的に整ってはいるが特別女子生徒に騒がれる程でもない。ギャルゲーで例えるとの主人公の友人Aといったところだろう。趣味は読書で、暇な時は読書、授業中も周りの目など一切気にせず読書らしい。

「なに突っ立てるの。早く夏目君のところに行きなつてば」  
痺れを切らした柚子に無理矢理図書室の中に押し込まれ、バタンとドアを閉められる。

同じ図書委員で同じ曜日にもいつも一緒に仕事をしているが、いまだに読書中の龍之介にどう声を掛けたらいいのかわからない。真剣な顔つきで本に目を通す彼の邪魔をするのは気が引ける。けれど声を掛けなければ仕事分担ができない。彼の読書の邪魔をせずに仕事を円滑に進める方法を考えるのは本当に難しい。

閉められたドアの方を向き、まだ居るであろう柚子に助けを求めたくなった。だがまた彼女の手を煩わせるわけにもいかない、その気持ちをぐつと我慢する。

ゲームならここで選択肢が出て簡単に進められるだろう。リアルはそういう点が面倒くさい。セーブもリセットも出来ない、万が一選択を誤っても、その選択前に戻る事はできない。下手をしたら相手に嫌われてそのまま「はい、さようなら」になりかねない。そのルートだけはなんとしてでも避けたい。

こうなったら今までやってきたギャルゲーの中から現状に最適な選択肢を探すしかない。

佳耶は過去やってきたゲームのシナリオを記憶のデータベースから検索する。

まず舞台は図書室。そして攻略相手は読書が好きな少女。この二つのキーワードから抽出されたシナリオの選択肢こそ現状を打破するのに必要なものだ。該当したシナリオを一つ一つ思い出す。その中に一つ、今佳耶が置かれている状況と全く同じものを見つける。

これでいこう。

佳耶は『ウインター・ティアーズ』の図書委員のルートを実行することに決めた。

まず主人公（佳耶）が攻略相手（龍之介）を無視して勝手に仕事を始める。それに気付いた攻略相手（龍之介）が主人公（佳耶）に勝手に何をしているのかと尋ねる。そして二人の会話がそこから始まる。フラグ完成。

頭の中で描かれたシナリオは完璧だ。後はこれを実行すればいい。気合いを入れてカウンターの方に体の向きを戻す。

「考え事は終わったのか、葉鍵」

ストレートに龍之介と目が合う。一瞬で佳耶の体が凍りついた。

「なんかドアをトントン叩いてたから気になって見てみたらさ、葉鍵がドアと会話してるからどうしたのかと思った。話しかけられる雰囲気でもなかったから暫く見てただけ。なんか悩みでもある

のか？」

見られていた。ギャルゲーのシナリオを必死に思い出している間、抜けない姿を。

「……死にたい」

口から本音が漏れる。

「死にたくなるくらい深刻な悩み!？」

似たような反応を今朝も見た気がする。

「死にたい。今すぐ消えたい。でも大丈夫。仕事するから。わたしは平気。あはははは」

「いや、大丈夫じゃないだろ。目が死んでるし、顔笑ってないし」

「大丈夫、大丈夫。ちよつと選択肢とイベントを起こすタイミングを外しただけでフラグは折れてない。結果オーライ」

「言ってることも意味わかんないし」

「一時の恥など恐るるに足らず」

「……会話も成り立ってない」

脳に熱が集中し、何も考えることが出来ない。

カウンター内にあるパイプ椅子に鞆を置くと、そのまま床に吸い付けられるようにへたり込んだ。

作戦失敗。しかも変な奴と思われた。立ち上がる力もなければ立ち直る心もない。

「夏目君、わたしの事は気にせず読書を続けてください……」

床にのの字を書きながらため息混じりの声で呟いた。

ため息は幸せが逃げると言うが、今日だけでどれだけの幸せを逃しただろうか。

消えた幸せの数を指折り数えていると、右肩に重みと僅かな温かさを感じ取る。男性特有の骨張った指が視界に入り、体が硬直する。

「葉鍵」

耳のすぐ近くから聞こえる低い声。

心臓は高鳴り、息が苦しくなる。

この後に続く言葉はなんだろう。妙な期待で胸が熱くなる。もは

や体に走る熱も脳を駆け巡る妄想も止められない。

目を閉じてじっと次の言葉を待つ。

肩を掴む龍之介の手の力が少し強くなり、そして

「なんでもないなら真面目に仕事しよう。さつきから時間を無駄にしているから」

静かな声で諭される。

「はい。すみませんでした」

これにはもう謝ることしかできない。

脱力状態の足を強く叩き、立ち上がる。

「わたし返却された本を棚に戻してくるね」

龍之介の顔を見ないまま『返却チェック済み』と書かれた張り紙がされた段ボール箱に足を向ける。

箱の中には本が十冊ほど入れられていた。その殆どがライトノベルで、大きさ、重量を考えても一回で全て片付けられるだろうと予測する。佳耶は積み重なった本を両手で持ち上げ、カウンターから出て行く。

「今月から読書月間が始まったから来週はもつと増えるかもな」

龍之介の言う『読書月間』は毎年十月に実施されるもので、多くの生徒に図書室を利用してもらうことを目的に始められた。何年か前の図書委員長が独断で始めたそうだが、その時はあまり普及しなかったらしい。けれどそれから彼の熱意を継いだ委員によって続けられ、今では「十月と言えば読書月間」と認識される程校内に浸透している。かといって利用者が急激に増えているのかと言えばそうでもなく、普段に比べれば多い方かな、というくらいである。少なくとも去年はそうだった。

龍之介がどんな期待をしているのかは定かではないが、今年も去年とそう変わりはないだろう。何しろざっと室内を見渡したただけでここにいる生徒は両手で間に合う数しかいないのだから。

佳耶は本を持ってライトノベルが並べられている本棚に向かう。

本は全て作家名別に並べられており、律儀に本屋のような仕切りま

で作られている。

作家とタイトルを見ながら一冊一冊本棚に戻す。戻す時は本が折れてしまわないように丁寧に入れる必要がある。時々巻数がバラバラになっていたというだけで激昂する生徒もいるので、本の並びがおかしくしたらそれも直さなくてはならない。

「気がついたら自分でやればいいのに」

佳耶は不満を漏らしながらも順番が目茶苦茶になっている本を元通りに直していく。

最後の一冊を棚に戻したその時、体に寒気が走り、手が止まる。今朝と同じ視線だ。それも今度はかなり近い。近すぎる。視線の強さから、真後ろにいる気がしてならなかった。

恐ろしいが確かめる他ない。三つ数えたら後ろを向こう。

一、二、三……

「あの！」

振り返ろうとしたその瞬間、突如背後から声を掛けられる。驚いた拍子でバランスを崩し、本棚に後頭部をぶつける。大きな痛みの後、波紋のようにじわじわと痛みが広がってくる。

「だ、だだ、大丈夫ですか!？」

自分を驚かせた人物はたどたどしい口調でこちらの心配をしてきた。

「『だすか』ってなんですか？ 大丈夫じゃないです、痛いです」

怒気を帯びた声で答えると、その人物は体をびくつかせながら小さくなっていく。

「も、申し訳ないです！」

後頭部を擦りながら目の前の人物を凝視する。

自分より少し背の低い女子生徒だ。丸顔で青色の太いフレームの眼鏡を掛けている。眉毛は整えていないのか妙に太い。真っ黒な髪を後ろでアップにしているが、後れ毛があらゆる場所から出ている。前髪は短く、真っ直ぐ切りそろえられている。手を後ろに回し、もじもじしながら何か言いたげに佳耶と床を交互に見ていた。

この子が朝から自分を付けていた人物なのだろうか。だとしたら理由が皆目見当が付かない。

『佳耶って昔から色々が目立つことが多かったじゃない。だから結構変なところで変に有名になってるんじゃないかなって』

柚子の言葉が脳裏をよぎる。

「ねえ、あなた」

「すみませんこれ！」

言葉を遮られたかと思うと、いきなり後ろにあった手をこちらに突き出してきた。呆気にとられ言葉が出てこなくなる。

よく見ると彼女が突き出してきたものは手ではなく、青いビニール袋だった。そのビニール袋には見覚えがある。アニメや漫画のグッズ専門店の袋だ。少女はそれを佳耶に向けたまま顔を伏せ、微動だにしない。

これは受け取るべきなのか。しかし相手の素性がわからない以上受け取ることはい出来ない。

「あなた何年何組の誰？」

「2年C組の……乙波穂瑞、であります」

穂瑞と名乗る少女は震える声で答えた。

「これは一体何？」

「これは、その……ゲームであります。葉鍵殿はゲームがお好きと聞きましたので、是非これをやっていただきたくお持ちした次第です」

つまりそういうことか。佳耶は納得した。

穂瑞は佳耶のゲーム好きの噂を聞き、自分のお薦めするゲームをやってもらいたく自分を追いかけていたということなのだろう。

「で、これどんなゲーム？」

彼女の気持を踏みにじることでもできず、袋を受け取る。

その問いに穂瑞は周りをきよるきよると気にし始め、顔に動揺の色が現れる。

「兎に角やってください！ お願いします！」

質問に答えないまま走ってその場から消えた。

「変な子……」

佳耶は手の中の青い袋を見つめる。

パッケージの大きさから携帯ゲーム機ではなく据え置きゲーム機のゲームだと思われる。だとしたらPP2かPP3かWBOX777かNiiのどれかのゲームのはずだ。

どんなゲームなのか気になり、袋の中からそれを取り出す。

そしてパッケージを見た瞬間固まる。

『ロマンスメモリア ガールズモード』

パッケージにはそんなタイトルと、二次元の美少年達が描かれていた。

佳耶は黙ってパッケージを袋の中に戻す。

「見なかったことにしよう」

佳耶はそれを鞆に入れるためにカウンターに戻る。

相変わらずカウンター当番の龍之介は本を読みふけていた。一連の騒ぎに気付いた様子はなさそうだ。

彼に見つからないように静かにゲームを鞆の中にしまい、再び本の整理をするため本棚の森に戻った。

佳耶と謎の二人 - 5 (前書き)

この物語はフィクションです。

登場人物、場所、出来事はすべて架空のものです。

二次元の人間は三次元では存在しません。



家に帰り、家族揃って夕食を食べても、お風呂につかっても、今日の一連の出来事から生まれた心の靄は晴れなかった。

あれが入っていると思うと恐ろしくて家に戻ってから一度も鞆を開けていない。鞆がまるでパンドラの箱のように思える。開けたらとんでもないものが出てくるに違いない。と、いうより自分で入れてしまったのだから出てくるのは当たり前だった。

何度か耳にしたことがあるゲームのジャンル『乙女ゲーム』。ギヤルゲームとは逆に主人公が女の子で、攻略対象が男の子らしい。二次元の女の子は好きだが、二次元の男には全く興味のない佳耶にとって乙女ゲームの存在は理解しがたいものだった。『女性ギャルゲームの集い』の中に『両刀使い』と呼ばれる人がいて、乙女ゲームの情報はその人が勝手に教えてくれる。だがその人が教えてくれるのはそのゲームのダメな部分ばかりで、具体的な内容などはあまり伝えてはくれない。そのせいで佳耶の中では既に『乙女ゲーム』ダメゲーム』という方程式が完成していた。

あの穂瑞という少女にはなんと返すというのか。これを貸してくれたということは彼女はこれが好きなのだろう。クソゲーやダメゲーを好んで人に貸す奴はまずいない。嫌がらせを除けば。同じゲームーとして相手は相手のゲームを否定せずにやんわり事を終わらせた。い。

しかしゲームをやらずに返すということはゲームを否定することと同じじゃないだろうか。最低でも三十分はやる義務がある。ゲームを否定する権利を持つのはゲームをやった人間だけなのだから。ベッドの上で転がりながら頭を抱える。

こういう時はこれしかない。

佳耶はゲームの為だけに買った大型テレビとWBOX777の電源を入れる。更にWBOX777に『モンスター×モンスター』オ

ンライン』のディスクをセットして起動させる。  
ゲームをしよう。

「ここ暫くは『君と約束の丘で』に夢中で『モンスター×モンスター オンライン』をやっていたので久々のプレイになる。ギルドの仲間みんな元気だろうか。ログインして懐かしい自分の分身と対面する。そして久方ぶりの狩人広場に感動すら覚えた。」

「モンモンよ！ わたしは返ってきた！」

チャットモードを起動してギルドメンバーに話しかけてみる。すぐに数名から返事が戻ってきた。どうやら忘れ去られてはいなかったようだ。

「久しぶりに一緒に狩りに行きませんか？」

そう打っている途中、画面上にボイスチャットへの誘いが表示される。相手の名前は『ツジヤン』。

佳耶は慌ててヘッドセットマイクを繋ぐと、ボイスチャットの許可ボタンを押した。

「あーあー。マイクテス、マイクテス」

ヘッドホン越しに明るい声が聞こえてくる。

「久しぶりやなカヤツチ。元気にしとったか？」

「この懐かしい似非関西弁いいですねー。元氣してましたよツジヤン」

嬉しさで顔がにやける。

ツジヤンはWBOX777を買ってから初めて出来たオンライン上の友達で、本人曰く関西に住んでいるそうだ。だがその口から出る関西弁はどうもアニメや漫画の受け売りのような嘘くささがある。性別は女性。年齢不詳。好きなゲームはFPSとアクションゲー。最近是一緒に『モンスター×モンスター オンライン』をやっている。

「最近全然モンモンに来なかったやん。別のゲームに浮気しとったんか」

「当たり前です。『君と約束の丘で』をやっておりました」

「知つとる知つとる。あれやろ、元はPCの18禁ゲーでPPBに移植されたっつーやつ」

「ツジヤンなんでも知ってますね」

「私のゲーム情報収集能力を舐めたらあかんで」

好きなゲームは限られているが、彼女の持つゲームの情報量は確かに凄い。自分の興味あるものからないものまで全て把握している。噂では彼女は歩くゲーム雑誌と呼ばれているらしい。

「そうか」

佳耶はあることを思いつき、鞆から青い袋を出す。

「情報通のツジヤン様！ 折り入ってお願いがございます！」

「な、なんやいきなり。どないした？」

「『ロマンスメモリア ガールズモード』ってゲームの情報をください」

この世界の何処かに居るであろうツジヤンに向かって深々と頭を下げて頼み込む。

ゲームをやらなくてもある程度情報さえ知っていれば相手にやっと思わせることが出来る。佳耶はそう踏んでいた。

「『ロマンスメモリア ガールズモード』……」

ツジヤンはタイトルを繰り返し呟いている。

彼女がこのゲームについて詳しく知っていることを強く願う。

「それ乙女ゲーやろ？ なんや、カヤツチ乙女ゲーもやるようになってたんか？」

何か知っているような口ぶりに佳耶は安堵する。そして彼女にこれまでの経緯を説明する。

「事情は把握したで。けどな」

「けど、なんです？」

「ほんまにそれでええんか？ 情報だけでやったつもりになってその子騙して」

その言葉に心がぐらつく。

「別に情報を提供するのはかまへんよ。せやけどそんな誰でも知っ

てるような情報だけで『はい、クリアしました』なんて言えるん？無理やる。ゲームの中には雑誌やインターネットにも載ってない情報が一杯あるんやで。相手がどんな馬鹿でもプレイしてないことくらい気付くと思うで。それやったら正直に『興味がないのでお返しします』って言った方がええって」

返す言葉が見つからない。黙ってツジヤンの話を聞く。

「それが嫌ならカヤツチは大人しくゲームをやるべきや。やった上で否定なりなんなりすればええ。やらずに周りに便乗して否定する奴はクズや。カヤツチはそんなクズと一緒にされたくないやろ？」

「……うん」

「なら決まりや。誰だって初めて見るもんには警戒するもんや。一人でやるのが不安なら私が遠くから援護するさかい、気合い入れてやってみ」

「わかった。やってみる」

佳耶は袋からゲームを取り出す。パッケージにきらきらと輝く少年達の笑顔だけで「無理です」と音を上げたくなる。だがやると言ってしまった手前、やるしかない。

プレイ可能機種はPP2と書かれている。これを起動するにはWBOX777を止める必要がある。これを止めてしまつとツジヤンとのボイスチャットも出来なくなってしまう。その旨をツジヤンに伝えると

「ほんならパソコンのボイチャにしようか」

ツジヤンの提案に賛同し、『モンスターxモンスター オンライン』をログアウトしてゲーム機を止める。それと同時にパソコンの電源を入れる。加えてパソコンが完全に立ち上がるまでの間にテレビにPP2の配線を繋ぐ。これで戦闘準備は整った。

今度はパソコンのボイスチャットを起動してツジヤンに繋ぐ。

「準備はええか？」

「いつでも戦闘可能です！」

「よっしゃ。そんならまずはパッケージ開いて説明書出してみよか」

指示通りパッケージを開く。説明書、ゲームディスク両方に笑顔の少年が描かれていて唾然としてしまう。ギャルゲーでは当たり前だが、まさか乙女ゲーもそうだとは思わなかった。

一応借り物なので破らないように丁寧に説明書を手に取る。

「次に説明書を開いてストーリーの説明を読む。ギャルゲーでもよくあるやる。あれや」

説明書をぱらぱらと捲り、ゲームの概要を読む。

『桜舞い散る春。すずかぜ学園に入学した「あなた」はある少年達と出会います。少年達は最初は「あなた」のことを嫌っていたりただの友達とっています。けれど彼らと仲良くなればデートに誘われたり、悩みを打ち明けてくれたりするでしょう。「あなた」は卒業までの三年、どんな恋をしますか?』

「知らないっての」

「はいはい、ツッコミは後でな。次にキャラクター紹介見ても」

次のページを開いてキャラクター紹介ページを開く。二次元の美少年達が格好いいのか悪いのか訳のわからないポーズをとって並んでいる。

短髪、長髪、王子様系、オレ様系、先輩、後輩、赤髪、青髪……

バリエーションは結構あるようだ。しかし

「全員同じキャラに見えます」

率直な感想を伝える。

「それ、ギャルゲーにも言えると思うで……」

ツジヤンに切り返される。

「……前言撤回します」

その後もツジヤンの言う手順に従い説明書を捲っていく。システムも操作方法もさほど凝ったものではないようだ。

最後のページを読み終わった事を伝えようと、二人で息を吐いた。

それとほぼ同時に、まるで計ったかのように佳耶の携帯電話が鳴る。画面には『瑠音』の文字と携帯番号が表示されていた。

「すみません、ちょっと友達からの電話に出てもいいですか?」

「ええよ。こつちもこつちでちよつとやることあるさかい」

ツジヤンに断つてチャットを一度切る。そして瑠音からの電話に出る。

「もしもし。どうしたの瑠音」

「佳耶っち！ 朝言つた掲示板もう見た!？」

「いや、見てないけど」

「いいから早く見て！ 大変なことになってるの！ 見て見て見て！」

瑠音に捲し立てられ言われるがまま『女性ギャルゲームの集い』の掲示板を開く。

「開いたよ」

「そこに『romio』って投稿者の書き込みがあるでしょ。それ見て！」

彼女の言つとおり、romioという名前の投稿者が何かを書いていた。その内容を読んでみる。

『カヤツチ様へ

記念すべき千人目のヒロイン攻略おめでとございます。女性でありながら貴女様のギャルゲーに注ぐ愛と情熱には感服いたしました。そんなゲームを愛する貴女様に私から一つお願いがございます。是非、貴女様に私が制作した乙女ゲームをやっていたいただきたいのです。畑違いだと言うことは重々承知しておりますが、貴女様にならこのゲームをクリアすることができればでしょう。お返事はいつでも構いませんので、是非前向きにご検討ください。

romio』

一通り読み終えたところで呆然としてしまう。それから次第にふつふつと怒りがわき上がってくる。

「なにこれ!？」

「酷いでしょ！ これ絶対に『荒らし』だよ！ この前の書き込みは消されちゃってないみたいだけど、これも管理人さんに頼んで消してもらおうよ」

消す消さないはこの際どうでもいい。何故今日は立て続けに乙女ゲームを勧められたのか。何故乙女ゲームなのか。偶然にしては出来過ぎている。穂瑞とこのromioという人物は何か関係があるのではと邪推してしまう。

さっきまでツジヤンと読んでいた説明書をパッケージに戻し、荒々しく封をする。

「瑠音、この人はわたしが対応するから管理人さんには言わなくていいよ」

電話片手にキーボードを打つ準備をする。

「二度とこんな書き込み出来なくなるような断り方をするから」

「いいぞ！ やつたれ佳耶っち！」

返事を書きたいからと、ここで瑠音に電話を切ってもらう。

次はツジヤンにこの事を話す番だ。再びチャットを繋いでツジヤンを呼ぶ。

「やる程。これがほんまの『乙女の日』ってやつやな」

「笑えないです」

「はっはー。すみません。そんなら今日はこれでお開きにしましょ。終始ツジヤンを振り回してしまったことを何度も詫げる。彼女は笑って気にするなと言ってくれるがそれが余計心苦しくなる。

「じゃあ、結局ゲームはやらんってことか」

少し寂しそうに静かに言った。

「すみません」

「だから謝らんでええって。ほな、おやすみ」

ツジヤンとの会話が切れる。

これで心置きなく戦える。

佳耶は指をキーボードに配置してromioへの反撃を考える。

いざ書こうとするとなかなか文章が思いつかない。覚えるのは得意だが書くのは苦手なのだ。だから掲示板への書き込みもメールの内容も適当な単語を並べた短文になってしまう。しかしこれではきつとromioに対抗できない。

そうしてパソコンの前で悩んでから十分後、また携帯電話が鳴る。画面には『ありす』の文字。ありすからのメールのようだ。彼女からメールなんて珍しいと思いつながらその内容を見る。

『明日の朝むかえに行く』

それだけだった。それ以外何も書いていないのでどういう事なのかわからない。

携帯を閉じて再びパソコンとにらめっこをする。

結局なにも思いつかないまま、十月四日は終わりを迎えた。



佳耶と謎の二人 - 6 (前書き)

この物語はフィクションです。

登場人物、場所、出来事はすべて架空のもので

二次元の人間は三次元では存在しません。

昨夜の疲れが残っているせいか体が重い。

一晩眠気を我慢してromioへの反撃文を考えたが、どんなに頭を絞つてもいい文章が思いつかなかつた。それどころか段々こんなことを真面目にやっていることが馬鹿馬鹿しくなり、諦めて大人しくベッドに入ってしまった。どっと押し寄せてきた疲れで寝られると思つたが、目を閉じてもあのパッケージの少年達の笑顔とromioの書き込みが忘れられず何時間もうなされ続けた。必死に忘れようとしたが、夢と記憶の処理が不可能になつた脳が悲鳴をあげ、不快感を残したまま朝を迎えた。

心配そうな母をよそに鞆を引きずりながら玄関に向かう。

「行つてきます……」

家のドアはこんなに重かつただろうかと疑問を抱きつつ外に出る。いつものように自転車のチェーンをはずし道路に出ようとしたところ、

「よっす」

やや低めの少女の声で足が止まる。

すらりとした長身にサイドを剃つた短い髪。普通の男子より男子用の制服を上手に着こなしている少女は、こちらを見るなり口の端をあげて笑つた。

「お迎えに上がりました。お嬢様」

恭しく背を丸めて礼をする。本人は執事のもりだろうが、シルエットの美しさを思うと公爵様という言葉の方が似合う。

「あー……朝早くからどうしたの、ありす？」

とてもお嬢様とは言い難い間抜けな声で尋ねた。

ありすは顔を上げ、きよとんとした表情を見せる。

「昨日メールしたはずだけど。迎えに行くって」

そんなメールをもらった記憶がなく、佳耶は携帯を開いてメール

をチェックした。確かに受信ボックスの一番上にありすからのメールが表示されている。内容も彼女の言っている通りだ。romioのことに気を取られすっかり忘れていた。

「昨日柚子からメールがあったんだ。『佳耶がストーカーに狙われている』って。で、オレがボディガードに任命された」

話が誇大に広まっている。誰もストーカー被害には遭っていない。それに犯人はもうわかってている。

「ごめん、ありす。事情は歩きながら説明するよ」

自転車を引つ張りながらありすと並んで歩く。ありすの歩幅は大きい。彼女は普通の速さで歩いているが、こちらはそれより少し速めないとずっと並んでいることは出来ない。それ故、疲れる。

「悪い、速かった？」

佳耶の息が上がってきたのを察したありすは歩みを少し遅める。

この速さなら佳耶も歩きやすかった。

外見よし、性格よし、文武両道で気遣いもできる。彼女がもし男だったら惚れていたかもしれない。夏目龍之介の存在がなければの話だが。

「それで、事情ってのはなに？」

一連の事情を説明するのはこれで三度目なので、簡潔にまとめて話す。柚子同様、ありすも黙って頷きながら聞いていた。

「なるほど、ね」

ありすはどこかの探偵のようにわざとらしく顎に手を当てて真剣な面持ちで言った。悔しいことにどんな仕草をしても様になっつまうのが彼女の凄いとこらだ。

「ありすって組だよね。えっと、乙波、穂瑞だっけ。その子のこと何か知ってたりする？」

「知ってる。目立ってないよう目で目立ってるから」

2年C組乙波穂瑞。漫画部所属。見た目は佳耶が図書室で見たままで、性格は普段は大人しいが、友人達と話している時はかなり煩い。話している内容はいつもアニメ、漫画、ゲームなどの『オタク』

話で、それもかなり腐ったものらしい。所謂彼女は『腐女子』という分類の人種だ。『腐女子』という言葉を知らないクラスメイト達からは『オタ女』の通称で呼ばれている。普段連んでいる友人は漫画部の二人だけで、他の人と話しているところはあまり見かけない。学校行事にもあまり積極的ではなく、いつも二人と適当に時間を潰しているらしい。その為、周りからあまり好かれていない様子だ。C組は今度の文化祭でコント仕立ての劇をやるが、その準備にも参加しておらず、漫画部で展示する絵ばかり描いている始末。そんな自分勝手な行動にクラス中が呆れ返り、最初から彼女たちはいないものとして全ての準備をしている。

ありすの話に流石の佳耶も開いた口が塞がらなくなった。自分もゲームに全てを捧げるゲーマーだが、流石に学校行事にはきちんと参加する。面倒だからと適当なことをしてクラスから爪弾きにされたら学校のどこに自分の居場所があるというのだろうか。

自分は他人とは違う。他人と同じ事をするのは格好悪い。群れるのは弱い奴がすることだ。自分のやりたいように生きる自分たちが格好いい。穂瑞とその友達はきつとそういう考えも持ち主なのだろう。典型的な『引き籠もり系オタク』の思考だ。

だがそこで一つ疑問が浮かぶ。何故他人と自ら関わろうとしない彼女がわざわざストーリーカーマがいなことをしてまで自分にゲームを勧めてきたのだろうか。類は友を呼ぶというやつなのだろうか。考えれば考える程わからなくなる。

「大体わかった。これで解決するかはわからないけど」

「少しでも役に立てたなら嬉しいよ」

住宅街を抜けて商店街に出る。

「で、肝心の怪しい視線とやらは感じる？」

ありすの問いに首を横に振る。前後左右どこからも昨日の視線は感じない。

「感じたのは駅前の横断歩道からなんだよね」

「じゃあ電車組かバス組か。そこが近くなったらわかるかもな」

学校への最短コースは通らずに駅まで行く遠回りコースを歩くことになった。

いつもは自転車で風を切って走る道をゆっくり歩いていると感じる時間も風景も全く違うものに見える。それがとても新鮮で不思議と楽しい気分になってきた。

「そういえば、佳耶のクラスは文化祭で何やるんだ？」

「聞いて驚け、見て驚けの縁日」

「なんだよそれ」

「そのまま。何班かに分かれて昇降口前で出店開くの」

「なんか楽しそう、それ」

「ちなみにわたしは焼きそば担当。来てくれたらもれなく大盛りにして差し上げますよお客さん」

「是非行かせていただきます」

大げさに一礼するありすに思わず笑ってしまう。

「で、ありすは劇で何やるの？」

その質問にありすは胸を張り、誇らしげな表情で

「王子様。それもお客さんを全員爆笑の渦に巻き込む『笑いの王子様』だ」

「ど、どんな劇なのか想像できないけど面白そうだね」

西洋の王子様の衣装を着たありすを想像する。その姿はとても様になってるが、一体そこからどんな爆笑劇が見られるのだろうか。まさかどっかのお笑い芸人のようにワイングラスを片手にコントをするのだろうか。全く想像できない。

「内容は見てからのお楽しみ」

悪巧みを考えているような怪しい笑みを浮かべるありす。ますます気になってきた。

そんな話に花を咲かせている内に駅前の横断歩道はすぐ目の前だった。

朗らかな雰囲気なくなり、一気に張り詰めた空気が身を包む。

ありすも緊張の面持ちで辺りを警戒しているようだ。目つきが先ほ

どと打って変わって鋭くなっている。佳耶も辺りを見回しながら他の生徒達に合流する。注意深く生徒達を凝視するが、穂瑞らしき人物はいない。

よく考えてみれば視線を感じたのはバス組が到着したすぐ後だった。穂瑞はバスに乗っていた可能性がある。

「バスが到着するまで待つてみる？」

ありすの提案に頷く。穂瑞が降りてきたところをすぐに捕まえられれば一番だ。ありすと二人でバス停のすぐ傍まで移動し、バスが来るのを待つ。

ただ待つているだけという行為は意外と神経を使い、時間がゆっくり流れているような錯覚に陥る。上目遣いでありすを見ると、必死にあくびをかみ殺しているのがわかった。

ありすもこの池秋町の中学校出身で、電車もバスも使わずに学校に通っている。だが家は佳耶の家とは真逆の場所であり、佳耶の家に行くには一度学校を通り過ぎる必要がある。今日、わざわざこの為だけに朝早くから動いてくれた彼女の行動力と気遣いに深謝するしかない。

いつか道路の奥から来るであろうバスを待ち続けるだけで会話はない。この状況で何を話せばいいのかすら思いつかない。勝手に耳に入ってくる他の生徒達のざわめきがただ唯一の暇つぶしだ。

バスはまだ来る気配を見せない。

だが彼女はそろそろ来る頃だろう。いつもマイペースな彼女が。

「佳耶っち！ と、それにアリアリ？ 珍しいね、なにやってんの？」

案の定、軽やかな足取りの瑠音がいつもの調子でこちらに近づき尋ねた。

「おはよう瑠音」

「よお」

「おはよー。二人ともどうしたの？道路見ながら怖い顔しちゃって」「バスを待つてる」

「正しくは、バスに乗っているであろう乙波穂瑞を待っている」

「なんでオタ女なんて待つてるの？」

「説明すると長くなるから理由はまた後でね」

瑠音は自分の理解できない範疇の話には全て「なんで」の一言で相手を疲れさせる。ただでさえ疲れているのに瑠音の相手までして余計疲れるのは遠慮したい。この場合は適当にあしらうが吉だ。袖を引つ張りながら執拗に聞いてくる彼女を無視し、バスが来るのをじっと待つ。

何台もの車が目の前を通りすぎるのを見送っていると、遠くから背の高い白い車両が姿を見せた。この時間帯にこの道路を走るバスと言えば一つしかない。数年前、生徒達の熱い希望により実現した学校行きのバスだ。ありすとの推測が正しければ穂瑞はこのバスに乗っている。

横断歩道の信号は青に変わったようで、後ろから沢山の足音が聞こえる。それを追うようにバスがバス停に止まり、そこから土石流のように生徒達が降りてくる。佳耶は目を凝らして生徒の波から穂瑞の姿を捜す。一秒でも速く横断歩道を渡りきりたい生徒達は風の如く佳耶達の前を素通りしていく。少し目を離したらすぐに見失ってしまいそうな程だ。寝不足の中途切れてしまいそうな集中力を必死に保ち、丸顔の青いフレームの眼鏡を掛けた少女がバスから降りてくるのを待つ。しかしまだそれらしき少女は現れない。

すでに信号は赤に変わり、渡り損ねた生徒達が横断歩道の前に群れをなす。先ほどまでは早馬のようだった生徒達は荷台を運ぶ口バのようにゆっくり歩き始めた。これならまだ捜しやすい。そう思った矢先、バスは扉を閉め、追い抜いていく車の後を追って佳耶達の前を走り去って行った。バスから最後に降りた生徒は茶髪の子生徒だった。佳耶は呆然と立ち尽くしながら遠ざかるバスを目で追う。

「いなかっただな、乙波」

佳耶は無言で頷いた。ありすも隣でため息を吐く。

「バス組でもなかつたのかな」

「かもな」

無駄な時間を過ごしてしまったことに後悔し、二人同時に肩を落とす。

「あのさ、ちよっと思っただけど」

今までいないもとして放ったままにしていた瑠音が口を開く。

「佳耶つちとアリアリ今日は二人とも佳耶つちの家から歩いて来たんだよね？」

「うん。そうだけど」

瑠音は波を打つ癖毛に指を絡ませながら少し困惑した表情を見せた。佳耶から目を逸らし、何か言いたげに口をもごもごと動かしている。

「だからなんだ？」

穂瑞が現れなかったことと、瑠音の態度に苛立っているありますが怒気を交えながら聞き返した。それに対し、発言を躊躇っていた瑠音は髪を絡めていた指を止め

「オタ女が乗ってるバスはさっきのバスのより一つ前のやつだよ。自転車に乗ってくる佳耶つちがいつも合流するやつ。二人とも歩いて来たならいつもよりここに辿り着く時間が遅いはずだから、電車組もバス組もメンバーが違うと思うよ」

言いにくそうに静かに指摘した。

考えてみたらそうだ。いつもの全力疾走の自転車と今日のような亀の歩みでは掛かる時間と着く速さが全く違う。なら当然その時間帯に着く電車組もバス組も違う。バスは様々な地域から生徒達を乗せ、約十分置きにこのバス停に到着する。穂瑞が乗っていたバスは佳耶が着く前にとくに彼女を降ろしていたのだ。そして、彼女はもうとつくに学校に着いている頃だろう。

「もっと早くにそれを言え！」

すっかりご立腹のありすは鼓膜が破れそうな程声を荒げて叫んだ。「だって二人とも全然あたしの話聞いてくれなかったじゃん！」

涙目の瑠音がそう反論する。



確かにそうだ。佳耶は言葉を失う。ありすも苦悶の色を浮かべ、口を閉ざしてしまった。

それから無言のまま信号が青に変わった横断歩道を他の生徒達に混じって渡る。周りの人間は楽しそうに話をしているのに自分たちは小さな揉め事で空気を重くしてしまい、心が酷く痛む。こんなことで関係が壊れてしまったらと不安になる。前後を歩く二人の表情が見えないのが余計に不安を煽る。

「瑠音は……瑠音はなんで今日この時間にいたの？ いつもはわたしと同じ時間に来てるのに」

出来るだけ明るい声で尋ねた。

「……ただの遅刻。二度寝しちゃって。起こしてくれる人誰もいないから」

こちら見ずに少し暗い声で言った。質問に答えてくれただけよかったと安堵する。

けれど会話はこれきりで終わり、その後は沈黙のままいつもの通路を歩いた。正門が近づき、佳耶はいつものように右に曲がる。正門と駐輪場の分かれ道で二人と別れると思っていたが、不思議なことに二人とも一緒に右に曲がり、佳耶の傍を歩いていた。瑠音はいつものことだが、ありすまで付いてくるとは思わなかった。

「瑠音」

後ろからありすが前を歩く瑠音の名前を呼ぶ。

「なに？」

瑠音は振り向くことなく返事をした。

「ごめん」

ありすがそう呟いた瞬間、秋風が後ろからやって来て三人を追い越していった。

「うっん。あたしこそごめんね」

銀杏の葉が擦れ合う音の中から瑠音の声がはっきりと聞こえた。風や葉の音よりも綺麗に聞き取れたのはきつと勘違いではない。後ろから聞こえるありすの足音が少し軽くなったのが証拠と言える。

開きかけていた二人の距離が元通りになったことに胸をなで下ろす。そして今度は次は自分の番だ。

「二人ともごめん。わたしのせいで迷惑かけて。本当はわたし一人で解決すべき事なのに」

そう謝ると、軽く背中を叩かれた。

「迷惑だなんて思ってないっての。友達が困ってたら助けるのが当たり前前だ」

「そうそう。佳耶っちだって昨日あたしのこと助けてくれたじゃん。事情はわかんないけど、お互い様ってことで力になるよ」

ありすに便乗して瑠音が調子を取り戻したように明るい声で言った。

昨日は彼女に小テストが行われる前の休み時間を使ってみっちりテスト範囲の内容を教え込んだ。一分に一度音を上げる彼女の尻を叩き、教えている内容を頭に無理矢理叩き込ませた。その甲斐あって結果は良さそうだとすぐに報告が届いた。

「小テストの結果は、瑠音が頑張った結果だよ」

「違うって。佳耶っちが助けてくれたお陰。じゃなきゃ全然わかんなかったよ」

「どっちでもいいだろ。結果が同じなら」

駐輪場に自転車を置き、しっかりと鍵とチェーンをかけた事を確認すると、二人と一緒に昇降口に向かう。

途中、念のため辺りの物陰に目をやるが、誰かが隠れている様子はどこにもなかった。

佳耶と謎の二人 - 7 (前書き)

この物語はフィクションです。

登場人物、場所、出来事はすべて架空のものです。

二次元の人間は三次元では存在しません。

今日の授業は昨夜の疲れでほぼ睡眠学習となった。疲れた日に聞く教師の長話ほど心地よい子守歌はない。そのお陰で放課後を迎える頃にはすっかり元気を取り戻した。

鞆に教科書とノートを詰めながらこれから何をしようか考える。まずは鞆の奥に封印していた青い袋の中身を穂瑞に返す。これを終わらせない限り今日という日を終わることが出来ない。C組に行けば会えるだろう。適当に理由を付けて返してさっさと帰ろう。

鞆を肩に掛けた時、微かに鞆が震えているのに気付く。佳耶は鞆の中から小刻みに振動している携帯電話を出した。画面には「あります」と表示されている。

「もしもし、あります？ どうしたの？」

「ターゲットを確保した。すぐに校舎裏にくるべし」

受話器越しに聞こえるありすの声は何処か冷たく感じた。しかも何を言っているのかわからない。

「ターゲットつてなに？」

「乙波穂瑞」

ありすはそう言い放つとそれ以上なにも喋らなかった。耳をよく澄ますと、ありすではない別の少女の声が入ってくる。「離せ」と抵抗しているようだ。学年で最も背の高い女子ありすに、佳耶よりも背の低い穂瑞。ありすが穂瑞の首根っこを小動物を扱うように掴んでいる場面が容易に想像できる。

「わかった。すぐ行く」

佳耶は電話を切って急ぎ校舎裏に向かった。階段を駆け下り、靴を履き替える。

その時ある重要なことに気付く。ありすの言う校舎裏の『校舎』とは新校舎のことを言っているのかそれとも旧校舎のことを言っているのか聞いていなかった。

新校舎裏は昨日の朝佳耶が逃げ隠れた場所で、学校の仕切りと  
なっている高いフェンスの向かいに、いつも通っている裏門に続く  
歩道がある。そして道路から校内が見えないよう銀杏の木が立ち並  
んでおり、目隠しの役割を果たしている。ただし防音効果は一切な  
い。もしここに二人がいたとしたら姿は見えずとも声は外に筒抜け  
になっているので誰かしら気付いてありすを止めるだろう。

だとしたら旧校舎裏の方が可能性が高い。新校舎が建つて以来、  
旧校舎は『部活棟』と名前を変え、かつての教室が運動部の更衣室  
や文化部の活動拠点となっている。更衣室は当然窓に鍵が掛けられ  
ており、カーテンで中が見えないようになっていいる。文化部も外か  
ら聞こえる威勢のいい運動部員の騒音を嫌い、夏でない限り窓を全  
て閉め切っている。さらに校舎裏は今ももう使われなくなった埃ま  
みれの行き場をなくした教材道具置き場と化しているの、好き好  
んで近づこうとする人はいない。ロマンチックな愛の告白をする場  
所には向いていないが、今回のような場合に限って言えば最適の場  
所と言えよう。

佳耶は旧校舎裏を指して走った。駐輪場を突っ切り、旧校舎の  
角を左に曲がる。スピードが落とせず足がもつれそうになったが壁  
に立て掛けられていた木材を掴み、体勢を立て直す。土埃を上げな  
がら無事止まることに成功する。

「やっと来た」

目に飛び込んできたのは乙波穂瑞の胸ぐらを掴んでいるありすの  
姿だった。誰がどう見てもか弱い女子高生を喝上げしている不良男  
子にしか見えない。身の毛がよだつ光景に思わず後ずさりしてしま  
う。この件に無関係の第三者だったら迷わずこの場から立ち去って  
いるところだ。

涙目の穂瑞と目が合い、はっとしてありすを穂瑞から引き剥がし  
た。

「なにやってるのありす!?!」

「ターゲットの捕獲」

さも当たり前のように淡々とありすは答えた。

「もうちよつと別のやり方があると思うんだけど。これはやりすぎ。見つけたのが別の人だったら絶対に通報されてた」

冷や汗をかく佳耶に対し、注意されている彼女の方は顔のパーツを一つも動かさず冷たい表情で佳耶の先にいる人物を睨んでいた。

穂瑞は糸の切れた操り人形のようにぺたんとその場に座り込み、嗚咽を漏らしていた。

佳耶はまるで男女関係のもつれから発展した修羅場に遭遇したような嫌な気分になったが、とにかくこの事態を收拾させるのが最優先と判断した。

まずはありすにこの場から退いてもらい、穂瑞と二人きりになる必要がある。でなければ穂瑞は彼女が怖くて話などしてくれないだろう。

「ごめん、ありす。後はわたしが話をつけるから」

「大丈夫なのか？」

「本当にごめん」

穂瑞の様子を窺いながら何度も謝る。ありすは黙って頷き、静かに駐輪場の方へ去っていった。背筋を伸ばし、颯爽と歩く姿は先ほどとはまるで別人に見えた。

ありすの姿が完全に消えるのを確認すると、今度は屈んで穂瑞と向き合う。

「立てる？」

俯く彼女に手を差し伸べる。穂瑞は左袖で顔を拭いながら反対の手で佳耶の手を掴んだ。佳耶はその手が離れないように強く握りしめ、力強く腕を引っ張って立ち上がらせた。プリーツスカートに付着した土を払い、ありすにずっと掴まれていたせいで形が崩れてしまった制服を整えてやる。

「お母さんみたい」

嗚咽が止まった喉から小さくそんな言葉が聞こえた。

「よく言われる」

褒め言葉なのかどうか定かではないが、少し気恥ずかしくなった。穂瑞が落ち着いた頃を見計らい、佳耶は咳払いをして話を切り出した。

「まずは、わたしの友達が手荒なこととしてごめんなさい。彼女に代わってこの通り謝ります」

深く頭を下げる。

「それと、彼女のがこんな行動に出たのはわたしが全ての原因ですので、これについても謝ります」

「あ、ひゃい……いえ、どうも……」

今度は頭を上げ、身を守るように両腕で自分の体を抱く彼女を真剣な眼差しで見据える。ここからが本題だ。

「乙波穂瑞さん、わたし達がこんな行動に出たのにはある理由があります。これからわたしがする質問に『はい』か『いいえ』で答えてください」

そんなに強く言ったつもりはないが、穂瑞はびくりと体を震わせて小さく頷いた。

「質問その一。あなたは以前から私のことを知っていましたか」

肯定。

「質問その二。わたしのことを知ったのはつい最近のことですか」

否定。

「質問その三。あなたは昨日、ずっとわたしの後を付けていましたね」

少し止まってから肯定。

「質問その四。あなたがわたしにゲームを渡したのにはなにか理由がありますね」

肯定。

「質問その五。あなたは『romio』という人物を知っていますか」

肯定も否定も返ってこない。穂瑞はしきりに目を動かし、はつきりとした返事を返してこない。

「……いいえ」

目は口ほどにものを言う。恐らくこれは嘘だろう。これについてはもっと深く聞く必要があるだろう。

「質問その六。『romio』とあなたは関係がありますか」

蚊の鳴くような聞き取り辛い声で

「ありません」

と答えた。

「最後の質問です」

この言葉に青ざめた穂瑞の顔から安堵の表情が垣間見られた。

鞆の中から例の青い袋を取り出し、以前自分がそうされたように彼女の前に突き出した。

「わたしにこれを渡した理由を説明してください」

穂瑞は袋を受け取ると、曇っていた表情がぱっと晴れ上がり、目を輝かせ始めた。

「やってくれたのですね！」

「いや、全然。全くやってないです」

ありすのマネとは言わないが、無表情で答えた。

すると、一瞬で穂瑞の目つきが鋭く変わった。突然何事かと身を強張らせてしまう。

「どうしてやってくれないのですか！？ 葉鍵殿は学校でも屈指のゲーマーとお聞きしたが故、これをお渡ししたというのに！」

「どうしてって、それは興味がなかったからで」

「乙女ゲームに興味がないとは！ それでも葉鍵殿は女性ゲーマーなのですか！？」

いつの間にか詰め寄っていたはずの立場が逆転し、彼女に詰め寄られる形となってしまふ。この迫力、本当に先まで泣いていた少女と同一人物なのか疑ってしまう。

「いいですか。あたしがこのゲームを葉鍵殿にお貸したのは葉鍵殿に乙女ゲームの良さを知って欲しかったからであります。聞くに、葉鍵殿は女性ゲーマーでありながら乙女ゲームという素晴らしいも



のをやったことがないとか。ならば、このあたしの力で葉鍵殿を立派な乙女ゲーマーにし、是非『天舞高校乙女ゲームクラブ』の一員になっていただこうと思ったのであります。それなのに！ 葉鍵殿は全くゲームに触れることなく貸した翌日に返してくるとは何事ですか！？ せめて冒頭だけでもプレイするのがゲーマーとしての礼儀ではないと思いませんか！？ もしや葉鍵殿も『乙女ゲーム』は『腐女子ゲーム』だと勘違いされているとか。それは違いますぞ！ 『乙女ゲーム』は主人公が女の子で恋愛相手が男の子という至って健全なものであり、男同士の恋愛ゲーム『腐女子ゲーム』通称『BLゲーム』とは全く別物！ 故に、一緒にされると『乙女ゲーマー』『腐女子』共に失礼にあたるのですよ！ おわかりいただけましたか！？」

全くわかりませんし、興味がありません。

さつさと話を切り上げてしまいたいが彼女の口は止まることを知らなかった。佳耶は心の中でありすに助けを求めながらただただ穂瑞の『乙女ゲー論』を聞くしかなかった。

タイミングを見計らって適当に話を打ち切ろうと試みるが、心の奥でそうすることを躊躇ってしまいそれが出来ない。乙女ゲームについて語る穂瑞の表情は太陽の如く明るく、饒舌で、本当に好きなんだなと感じさせる。ギャルゲーに没頭し始めた昔の自分を見ているようだ。興味のない相手にひたすらその良さが伝わるように熱く語った日々を思い出す。

佳耶は気付いた。今目の前にいるのは昔の自分なのだ。自分の仲間作りに必死になっていた頃の自分と同じだと。

穂瑞の素性がわからず対応に困っていたが、自分と同類なら解決方法は割と簡単だ。

「それで、この『ロマンスメモリア ガールズモード』の凄いところは――」

佳耶は興奮する彼女の肩を軽く叩き

「自分の好きなものを無理に相手に押しつけるのはよくないよ」

静かにそう諭した。

穂瑞は口をぽかんと開けたまま制止する。これでやっと解放される。佳耶は鞆を持ち直してその場から立ち去る。

これでいい。好きなもの話に周りが見えなくなった相手にはこの一言が一番効く。自分が身をもってそれを体験したのだから間違いない。

駐輪場に駐めていた自転車の前カゴに鞆を押し込み、チェーンをはずして裏門を出る。

家に着いたらまずありすに連絡をしなくては。それから心配を掛けた柚子と瑠音にも結果報告をする必要がある。その後は……

その後はツジヤンと一緒に『モンスター×モンスター』でもやろう。

佳耶は帰宅後の予定を考えながら自転車を漕いで帰路についた。

佳耶と謎の二人 - 8 (前書き)

この物語はフィクションです。

登場人物、場所、出来事はすべて架空のものです。

二次元の人間は三次元では存在しません。

四日前の放課後で『romio』以外の事は全て解決したと思っていた。だがそれは間違いだっただよつで、きちんと決着をつけるべきだったと後悔した。まだ後ろから追ってくるのだ、穂瑞が。先日のような熱いトークを聞かされたくはないので柚子達に何を言われなくても彼女を無視する姿勢を崩さなかった。

今度は登校時間に限らず、授業の間の短い休み時間、昼休み、放課後、下校時までぴったり付いてくるようになっていた。これでは気が休まらない。

乙女ゲームには興味がないのでやらないと断ったはずなのに何故まだ追いかけてくるのか。理解不能。

「佳耶、次科学室に移動だよ」  
教科書と白衣を抱える柚子に促されて準備をし、教室の扉を開ける。

「あ……」  
視界に穂瑞の姿が入る。

彼女に捕まる前に柚子の手を掴んで科学室まで走る。少し後ろを振り向いてみるが、追ってくる様子はない。

あの日からずっとこうだ。いい加減教室から出るのが怖くなる。  
「私から乙波さんに『しつこくしないでください』って言おうか？」  
「大丈夫。これはわたしと彼女のゲーマーのプライドをかけた戦いだから」

こんなくだらないことに柚子を巻き込むことは出来ない。柚子だけではない。瑠音やありすもそうだ。全員この件に関わらせるわけにはいかない。

くだらないこと、と自分で言うておいて必死になっている。そんな自分に苦笑した。

穂瑞は本当に昔の自分に似ている。だから自然と逃げ出したくな

ってしまふ。過去に対する羞恥心で死んでしまいたくなる。

二年前、ギャルゲーに出会ってしまったばかりに佳耶は日夜その話しかしなかった。あれがいい、これがいいと気に入ったギャルゲーを周りに勧め、広めようと必死だった。共通の話題で盛り上げられる友達が欲しくてたまらなかった。わざわざ家にまで呼んでプレイしているところを見せたりもした。ゲームの中に出てくる小粋な台詞を日常会話に取り入れて周りを啞然とさせることもあった。そしていつしか沢山いたはずのゲーム仲間は徐々に離れていき、最終的にずっと話を聞いてくれたのはゲームとは全く無縁の柚子だけになってしまった。その時、柚子にあの言葉を言われた。

「自分の好きなものを無理に相手に押しつけるのはよくないよ」

一瞬で自分が恥ずかしいことをしていたと気付かされた。いくら自分が好きでも、自分と仲のいい人間がそれを好きになつてくれるとは限らない。人の好き嫌いなんでそれぞれなのだ。ゲームへの熱で盲目になっていた自分に柚子はそれを教えてくれた。それから一切ギャルゲーの話は口に出さず、どうしても発散したい時はネットの中だけに留まらせるようになった。

穂瑞には乙女ゲームにかける情熱を大いに発散できる安息の地がないのだろうか。ありすは彼女は漫画部に所属していると言っていた。漫画部になら同じ趣味を持った人が大勢いそうな気がする。それにいつも連んでいる友達だっている。それなのにどうして女性ゲーマーというだけで自分にしつこく迫ってくるのだろうか。

女性ゲーマーなら瑠音とありすだっけそうだ。二人とも学校でかなり有名なゲーマーだ。

瑠音は音楽リズムゲームが得意で、ゲームセンターに現れては大勢のギャラリーを作ってしまう程の凄腕プレイヤーだ。全国順位も常に上位にランクインしている。今度ゲーム会社が公式で開催する大会に出場するらしく、毎日ゲームセンターに通い詰めて優勝に向け特訓している。そんな彼女は通称『音神の瑠音』と呼ばれている。ありすは学校唯一の男装ゲーマーとして有名だ。ゲーマーという

のはおまけで、男装で有名と言った方が正しいが。彼女は男子の遊び仲間が多く、よく一緒にゲームをしているところを目撃する。普通女子が男子とゲームで遊んでいたら、共通の遊びで相手と仲良くしようとしているという謂われない噂をたてられるものだが、あらずに限ってはそんなものは聞かない。むしろゲームを通じて男女の仲を取り持つことの方が多し。そして付いた通称は『恋愛ケーブルのありす』。的を射た通称だ。

改めて考えてみると二人とも『恋愛ゲーム』というものとは無縁だ。瑠音は『女性ギャルゲーマーの集い』の掲示板はチェックしているが実際にやっているわけではない。ただ単に書き込みが面白いからという理由だけで覗いている。

と、なるとやはり穂瑞が佳耶に目をつけたのは偶然ではなく必然という結論に達する。

ジャンルは違えど恋愛ゲームが好きだからターゲットにしたのか。否、それはない。佳耶は高校に入学してからは柚子、瑠音、あらず以外には自分がギャルゲーマーだということは言っていない。だから学校内でギャルゲーマーだと知られるはずがないのだ。せいぜい『モンスター×モンスター』の高級プレイヤーか、公園で小学生と一緒にゲームをやっている『ゲーム姉ちゃん』程度の認識しかされていない。

「……わからない」

こうなつたらもう諦めて今日の放課後にでも本人に聞くしかない。苦渋の決断だ。

「考え事は終わったのか、葉鍵」

低く、重苦しい声が鼓膜に響く。

周りを見渡すと白衣を着たクラスメイトが全員佳耶の方を見ていた。

優しく腕を小突かれ横を見ると顔を真っ赤にした柚子が佳耶の手を指さしていた。どうやらまたいつもの癖が出ていたようだ。大した音ではないと思うのだが、神経質な教師には授業妨害並に耳障り

だつたみたいだ。

佳耶は席を立って右手を挙げ、教師に言った。

「授業に集中出来ないので外でゲームをやってもいいでしょうか？」

教師は目頭を押さえながら

「座れ葉鍵。そして静かにしている」

佳耶にそう命令した。

席に着いた佳耶は教師の命令通り、静かに寝ることに決めた。

教師に叩き起こされるまで目を閉じて日頃の疲れを癒した。

\*\*\*\*\*

放課後、ありすに頼んで穂瑞をまた旧校舎裏に呼んでもらった。

ありすに声を掛けられた穂瑞は相当怯えていたそうだが、事情を説明すると快く了承したらしい。

再び旧校舎裏で穂瑞と対面する。こうしてきちんとした形で会うのは四日前以来だ。この四日間は一方的に追われていただけなので『会っていた』にはカウントしない。

今日の穂瑞は怖がる様子もなく堂々としていた。たぶん、これが本来の彼女の姿なのだろう。

「ずっとわたしを追っていた理由は？」

単刀直入に尋ねた。回りくどく聞くのも、尋問するのも面倒くさい。この問題をさつさと終わらせたい気持ちで一杯だった。

「あたしどうしても葉鍵殿に頼みたいことがございまして」「いい加減苛々する喋り口調だ。」

「話す前にこっちの頼みを聞いて。まずわたしのことを『葉鍵殿』って呼ばないで。それとその似非戦国武将みたいな喋り方もやめて。こっちも敬語使わないから」

「はあ……では、葉鍵さんのことはどう呼べばいいのでしょうか？」

「好きな呼び方でいいよ。みんな好き勝手に呼んでるし」

穂瑞は黙り込んだ。名前の呼び方を考えるのはそんなに難しいのだろうか。

「じゃあ、佳耶ちゃん」

穂瑞は笑顔でそう呼んだ。

『佳耶ちゃん』なんて呼ばれるのは何年ぶりだろうか。なんだか首の後ろがくすぐつたい。

「で、頼みたいことって？」

「はい。実は佳耶ちゃんにどうしてもやってもらいたいゲームがございまして」

「乙女ゲームは却下」

冷たく言い放つと途端に穂瑞の目に涙が浮かんできた。

「そ、そこをなんとか」

「駄目」

「お願いします！ 一作だけなんです！」

「わたしは乙女ゲームとモバイルゲームはやらない主義なの！」

「お、ね、が、い、し、ま、す」

腕に絡みついてくる彼女を佳耶は必死に引き剥がそうとした。だが思っていたより力が強く、なかなか離れてくれない。

「romioさんに絶対に連れてくるように頼まれたのですー！」

『romio』。その単語に抵抗する手を止めた。

「やっぱりromioって人とグルだったんだ」

「黙っててごめんなさいです。romioさんには黙ってるって言われてたもので」

佳耶から離れた穂瑞はすとんと肩を落とした。

『是非、貴女様に私が制作した乙女ゲームをやっていたいただきたいのです』

romioが掲示板に書き込んだ内容を思い出す。

「あなたがどうしてもやってほしいゲームって、そのromioって人が作った乙女ゲームのこと？」

「そう！ そうです！ 佳耶ちゃんにromioさんの自作ゲーム



をやって欲しいのです！」

全ては一つに繋がった。後はこの誘いに乗るか乗らないかだ。ここで断つてもまたしつこく追われそうな気がするし、実は多少romioの作ったゲームがどんなものなのか気になってはいた。良作ならそれでよし。下手な同人レベルのゲームだったら笑ってやればいい。

「わかった。じゃあそれ一作だけね。それ以外はやらないからそのつもりで」

普段ゲーム機しか持たない両手を、柔らかい手のひらに包まれる。満面の笑みを浮かべ、目を輝かせながら見つめてくる穂瑞。同性相手でも流石にこれには少し胸がときめいた。ギャルゲーだったらノックアウトされていたところだ。

彼女はすぐにも佳耶をromioに会わせたいらしく、急遽明日の日曜日に約束を取り付けられてしまった。諦めると決めたのだから諦めるしかない。

時間と集合場所を決めた後、駐輪場で佳耶は穂瑞と別れた。

スキップしながら帰路につく彼女を見送りながら、明日自分は何をやらされるのだろうかという不安に心の一部が完全に乗っ取られた。

佳耶と謎の二人 - 9 (前書き)

この物語はフィクションです。

登場人物、場所、出来事はすべて架空のものです。

二次元の人間は三次元では存在しません。

運命の日曜日が訪れた。憂鬱な気分を解消する為カーテンを開けて太陽の光を体に浴びる。いつもならこれですっきり起きられるのだが、今日は青空のような清々しい気分にはなれない。大人しくカーテンを閉めて寝間着から適当に選んだスウェットに着替える。出来ることなら今日一日これを着たまま部屋で積みゲー崩しをやりたかった。今更ながら穂瑞と変な約束をしまったことを悔やんだ。普段通り顔を洗ってから一階のリビングに降りて朝食の席に着く。目の前には朝刊を読みながらコーヒーを飲む父と、子供向けヒーロー番組に釘付けになっている兄が座っている。

兄・葉鍵透耶は二十歳を迎えたばかりの大学生で、日曜の朝以外はあまり一緒にいる時間はない。大学の講義とサークル活動に忙しいらしく、平日は朝早くから出て行き、夜遅くに帰ってくる。普段交わす会話と言えば「いつてらっしやい」「おかえり」くらいだ。かと言って、今会話ができるのかというところではない。この時間は透耶曰く『スーパー透耶タイム』らしく、特撮、アニメ番組が終わる十時までテレビに集中しており、何を話しかけても適当な返事しか返ってこない。話しかけるだけ無駄なのだ。だからこの間だけは父も母も透耶を無視している。佳耶もそれに倣い、テレビの音を聞きながら朝食に手をつける。

「お母さん、今日ちよつと出掛けてくるね」

台所で洗い物をしている母に今日の予定を告げる。

「何処に行くんだ？」

母の代わりに尋ねてきたのは新聞から目を離さない父だった。

父も母と同じくらい……いや、それ以上に心配性で、佳耶が休日に出掛ける時は必ず『いつ』『どこ』『だれ』『なにをする』のか聞いてくる。柚子達と出掛けると言えば何事もなく出掛けることを了承してくるのだが、これがもし『だれ』『の部分に異性の名

前を挙げたらどんな反応を示すのだろうか。想像するだけで恐ろしい。

『いつ』は今日。『どこで』は穂瑞の話だと地元駅から六駅先の小畑町。『だれと』は当然穂瑞。『なにをする』はゲームと答えるしかないだろう。佳耶はそれを淡々と父に答えた。

「あら、穂瑞ちゃんって名前初めて聞いたわ。新しいお友達？」  
洗い物を終えて佳耶の隣の席に腰を落ち着かせた母が尋ねる。

その質問に思わず首をひねった。穂瑞とはつい先日会ったばかりでそれも半ストーカー状態だった。今日は彼女の頼みを聞くのと、romioの正体を探るべく出掛けるだけで、友達と遊びに行くとは微塵も思っていない。なんと言えばいいのか迷い、言葉が詰まる知り合い、ストーカー、トラブルメーカー、爆弾 様々な言葉が脳に浮かぶ。

「まあ、友達、かな」

無難な単語を選ぶ。

父は何も言わず新聞を捲り、母は「あらそう」と適当な相づちを打って朝食を口に始める。無言の食卓にテレビの中のヒーローの声が木霊する。横目でヒーローの活躍を眺めながら朝食を食べ終えた佳耶は静かに席を立ち、流して空になった食器を洗う。『自分で出来ることは自分でする』が葉鍵家のルールだ。佳耶も物心つく前から自然とそれに従っている。

洗剤の泡だらけの食器をすすいでいると、食事を終えた父が流しに自分の食器を置いてまたテーブルに戻っていった。『男のサポートをするのが女の仕事』。葉鍵家のルールその二だ。両親が結婚した時に定めたものらしい。その為、母は結婚後一度も働きに出していない。それどころか、父の用事に合わせる為に、自分の用事を急遽キャンセルすることも少なくない。相手に尽くす性格の母はそんな生活が続いていても楽しくやっている。佳耶はそんな母を見て育ったせいがこのルールは果たして正しいのか疑問を抱いていた。自分の好きなことや、やりたいことを捨ててまで相手に合わせる必要が

あるのだろうか。自分だったらストレスで死んでしまう。半ば苛立ちながら父の食器を適当に洗い、乾燥機の中に入れる。

「ごちそうさまでした」

まだ三人が残るリビングを出て、出掛ける支度をする為に部屋に戻る。

今日の天気を見ながらクロゼットとタンスから洋服を何着か引っ張り出す。たかがゲームをしに行くだけに洒落た格好はしたくないが、外に出るからにはまともな服を着ていきたい。付け加えるなら、先日買ったフォックスファーチャームも使ってみたい。トップスとボトムスを何パターンも組み合わせさせてそれなりの格好になるよう選ぶ。

「これでいいか」

Tシャツにニットのポンチョ。ボトムスはショートパンツで、それにファーのレッグウォーマーを合わせればバランスがいい。ショートパンツにフォックスファーチャームを付けて鏡の前で最終チェックをする。柚子と遊ぶ時はこの一連の作業に一時間は掛けるが、今日はその四分の一の時間で済んだ。

短い髪を寝癖直し程度に適当に梳かし、いつもより控えめなメイクをする。鏡に映る自分は普段学校に行く時と差ほど変わりはないが構わないだろう。今日は気合いを入れる必要などないのだから。

時計を見ると約束の時間までまだ一時間以上あった。待ち合わせ場所の駅までは自転車を飛ばせば十五分以内に着く。佳耶はそれまで暇つぶしに、クリア後プレイをやめていた『君と約束の丘で』をやるかとPPBの電源を入れた。

このゲームは後一人、幼なじみの少女だけ攻略していない。最初から主人公の少年に想いを抱いている設定だったため、他のゲームと似たような展開だと思えば後回しにしていた。現に、共通ルートの彼女は他のゲームのヒロインと似たような反応を示しており、それだけで先の展開が読めてしまった。正直なところ『幼なじみ設定』はお腹が一杯だ。

何度も見たシーンは全てスキップボタンで飛ばし、幼なじみとの重要なイベントだけじっくり見る。イベントは全て佳耶の思った通りに進む。ずっと主人公のことが好きだったけど、一度離れてしまったことで気持ち薄れてしまったが、また再会したことで好きという気持ち甦る。けれど離れていた間の溝を埋めるには時間が掛かり、時には主人公に冷たい態度をとってしまう。それでも最終的には主人公ことがずっと好きだったと告白する。大体このパターンだ。最近では『ヤンデレ化幼なじみ』という新たなジャンルが出現したが、これも一作ヒットしたことにより他の会社が真似て似たようなキャラを作ってしまったことで一つのテンプレートとなっている。どれもこれも『幼なじみ』という属性を上手く料理できなくなっている。否、料理できないと言うより創作料理を練りに練ってもうアイデアが浮かばないといった状態が正しい。

それでも『幼なじみ』の需要がなくなるのは、プレイヤーがその存在に憧れているからだろう。主人公に何かあった時、真つ先に気付いて気遣ってくれたり、味方になってくれるのは彼女たち『幼なじみ』なのだ。そして主人公だけに見せる『意外な一面』を持ち合わせていることも魅力の一つと言える。だから佳耶も例え展開が全て同じでも攻略してしまう。

「まあ、幼なじみが可愛いって思えるのはその子が女の子だからかな。男の幼なじみは……」

男の幼なじみ。その単語を思い浮かべるだけで苛立ちで肩が震える。やり場のない怒りを全てたまたま近くにあったクッションにぶつける。何度も拳でクッションを殴り続け、気持ちを落ち着かせる。ハート型だったものが得体の知れない形に変わり果てた頃にやっと怒りがおさまる。

ふと顔を上げて時計を見ると、針は約束の時間の二十分前を指していた。

佳耶はまだやり途中のゲームをセーブする。どこでもセーブ可能なのがADVの利点だ。これが不可能なADVは『駄目システム』

の烙印を押しでもいい位だ。

電源を切ったPPBを専用ケースに入れてお気に入りのヘッドホンと一緒に鞆に詰め込むと、急ぎ階段を駆け下りた。

「行ってきます」

一階の何処かにいるであろう両親に向かって出掛けることを伝え、玄関を飛び出す。そして自転車のチェーンをはずして勢いよく漕ぎ出す。休日の朝は平日と違い子供達が外にいないことは滅多にない。皆、透耶と一緒に朝の子供向け番組に夢中になっているのだ。なので車にさえ気をつければ全力疾走しても問題ない。

晴天の元、風を切り、自宅から十分も掛からず駅に到着することができた。駐輪場に自転車を駐め、盗まれないようしっかりと鍵とチェーンを掛ける。

駅の券売機前で待ち合わせと決めたのだが、ざっと見てみる限りではそこに穂瑞の姿はなかった。約束通りその場で彼女が現れるのを待つ。彼女はいつもバスに乗って学校にきている。なら今日もバスに乗ってここまで来るのだろう。そう考えている間に、少し離れた所でバスが停まる音が聞こえた。バスから降車する客たちを観察していると、その中の一人が駅の方を見るなり慌てた様子で駆けてくる。見覚えのある太いフレームの眼鏡を掛けた少女は案の定、バスに乗ってここまで来たようだ。

バス停から券売機前まではそれほど大した距離はない。佳耶はそう思っていたが、走ってきた穂瑞は着くなり前屈みになり、肩を大きく上下させながら荒い呼吸を繰り返していた。その様子を佳耶はまじまじと見下ろした。

眼鏡はいつも学校で掛けているものと同じだが、いつも地味なゴムでアップになっている髪は、和柄のシユシユでサイドテール状にまとめられている。上はパーカー、下はジーンズといった簡素な装いだ。所々に花や金魚などの和柄の刺繍があしらわれている。肩からぶら下がっているシヨルダーバッグも紅葉模様のプリントが入った和柄のものだ。穂瑞の身につけているもの全てに古風な模様が取

り入れられているようだ。

「どうしたのですか？」

やや顔を上げ、上目遣いの穂瑞と目が合う。やましい気持ちは微塵もなかったが思わず目を逸らした。

「お待たせしてしまっただようで、どうもすみませんです佳耶ちゃん」  
「別に、こつちが早く来ちゃっただけだから」

素っ気なく返したが、何を勘違いしているか、穂瑞はにこやかな顔で

「佳耶ちゃんは優しいんですね！ それにクールです！」

親指を立てて上機嫌になっていた。

どう扱えばいいのかわからない穂瑞を無視し、改札口に向かう。

「佳耶ちゃん、切符は買わないのですか？」

「これあるから」

少し慌てている穂瑞に佳耶は鞆から取り出した携帯電話を見せる。最近の携帯電話は便利なもので、改札機にかざすだけで電車にも乗れる。そんな便利な手は使わないわけにはいかないと、携帯電話を最新のものに買い換えて以来、佳耶は切符というものを買ったことがない。電車賃の支払いも、駅構内での買い物も全て手の中の端末一つで済ませている。

「なら安心です。では参りましょう」

穂瑞は鞆から和柄の定期入れを出し、ICカード式乗車カードを改札にかざして軽やかに佳耶の横を通り過ぎた。

「ここからはあたしが佳耶ちゃんをしつかりガイドしますので、迷子にならないよう付いて来てくださいです」

軍人のように利き手を額に当て、背筋を伸ばして敬礼のポーズをとる穂瑞。周りから視線が集中しているが気にしている素振りは見せない。出来ることなら他人のふりをしてやりすごしたかったが

「さあ早く付いて来るのです佳耶ちゃん！」

こちらも周りの目など無視するしかないようだ。

改札に携帯電話をかざして通過させてもらい、穂瑞の後を付いて



歩く。階段を上がり、上り方面のホームで電車が来るのを二人で待つ。

その間、穂瑞は佳耶に様々なことを話しかけた。自分のこと、部活のこと、クラスのこと、そして乙女ゲームのこと。ラジオのように一方的に佳耶の耳に情報を送り込んでくる。それに対し佳耶は適当に相づちを打ち、聞き流していた。

柚子達の時と違い、どういう訳か穂瑞には一切興味が湧かない。第一印象が最悪だったせいもあるが、何より話の内容が面白くない。こっちが共感できるような話をすればいいものを、何故か彼女の口からは批判的な内容の話しか出てこない。自分の話は自虐的で、部活、クラスの話は周りが低レベルだの子供だのといった相手を馬鹿にするようなものだった。親友であるありすが悪く言われているのではと思うと立てなくていい腹まで立つてくる。そして一番聞きたくないのが乙女ゲームの話だ。あれがいい、これがいいという話から始まり、数分もするとあれは駄目だ、これは駄目だの話に変わっている。ゲームを知らない人間に対してここまで熱く語る意図が全く見えてこない。何度も時計を見て早く電車が来てくれないかと心の中で願う。

「 なのですが、佳耶ちゃんはどう思われますか？」

「別に」

さっきからこの返事しかしていない。遠回しにあなたの話には興味がありませんと言っているつもりだったが、どうやら伝わっていないようだ。三十四回目の「別に」を言おうとしたところでホームにやっと電車が到着した。電車に遮られたことで穂瑞は口を閉ざし、一緒に電車に乗り込んだ。

上りの電車はいつも混んでいる。空いている吊革を捜し、堂々と構えてそこを陣取った。

「目的地はここから何駅？」

「えっと、六駅先の『小畑駅』なのです」

先程までとは打って変わって小声で穂瑞が答えた。

電車が動き出すと、その揺れに身を任せる。電車が大きく揺れる度、穂瑞はバランスを崩しそうになり、見ていて心配になる。

電車に乗っている間も穂瑞は自分の話を延々と語ってくると思っていたが、彼女は遠く窓の外を見つめたまま口を開かない。ホームにいた彼女とは別人に見える。

結局無言のまま一駅目に到着し、そのまま二駅目に向けて発車する。

だんだん居心地が悪くなり、佳耶はゆっくり言葉を出した。

「なにか話したら？」

「え？」

今まで散々喋り続けていた穂瑞が驚いたように佳耶を見た。

「さっきの話の続きは？」

「えっと……流石に人が多いところでは……です」

要約すると人の多い場所でおタク話をするのは嫌らしい。それなら普通の話をするればいいだけのことなのだが、それが彼女にとって難しいのだ。

「じゃあ、わたしに何か質問ある？ 答えられる範囲のものだったら答えるけど」

佳耶が振った言葉に、穂瑞は目を白黒させた。髪を触ったり、シヨルダーバッグをかけ直したりと落ち着かなくなっている。

「わたし何か変なこと言った？」

「な、何も！ 佳耶ちゃんの変じゃないのです！ えっと、では色々とお聞きしたいのです」

どんな質問をしていいのか予想ができないが、答えられるものは答えると言ってしまった手前、覚悟を決める。

「誕生日はいつでしょうか？」

「三月十八日」

「血液型は？」

「A B型」

「身長は？」

「百五十八センチ。体重とスリーサイズはノーコメント」

「じゃあ、次は」

穂瑞の質問によって佳耶の個人情報次々と車内中に晒け出されていく。もしこの情報がどこか知らないところで広まっているのを見つけたら犯人はこの車内の中にいる。今の内全員の顔を覚えておくべきか。穂瑞の止まらない口元を見ながら頭の中でそんなことを考える。

「次の停車駅は小畑です。途中車両とホームの間が空いている場所が」

車内に流れたアナウンスの声に反応し、穂瑞の口が止まった。彼女の質問攻めから解放され、佳耶は静かに安堵した。

「佳耶ちゃんここなのです。ここで降ります」

停車前の最後の揺れに耐えきつた穂瑞に続き電車を降りる。

降りたホームは池秋駅に比べて人が少ないように思えた。ホーム自体も少し狭い。ざっと見渡した時、目に入るのはポツポツと設置されたベンチと薄汚れた飲み物の自動販売機、そしてフェンスを越えた先にある民家。初めて降り立ったその場所はとても新鮮で、まるでゲームの一場面に迷い込んだ気分になった。

「佳耶ちゃん！ こっちなのです！」

下りの階段の前で手を振りながら名前を呼ぶ穂瑞の声で現実を引き戻される。こんなところで足止めされている場合ではなかったと気を取り直し、穂瑞の背を追って階段を下りる。三つしか並んでいない改札口を通り、今度は地上に出る為の階段を上る。

階段を上りきってすぐに目に飛び込んできたのは小さな本屋とその隣の喫茶店だった。本屋も喫茶店は池秋駅側にあるようなチェーン店ではなく、個人で経営していると思われる、民家の一階部分を改装して作った小さな店だ。更にその隣にも似たような雰囲気のお店が建ち並んでおり、数軒先にやっとコンビ二を捉えることが出来た。

「田舎」

率直な感想だ。

けれど嫌いではない。どの店も初めて見るが、店構えからその温かみを感じることが出来る。それに池秋駅周辺に比べてとても静かだ。とてもたった六駅離れた場所とは思えない。

「小畑町はいつも静かなのですよ」

穂瑞が歩き出したので佳耶はその後に続く。

「バスは通ってないの？」

「この辺は残念ながらバスは走ってないのです。ですから、romioさんの家までは歩くしかないのです」

交通の便が悪いのが難点らしい。

暫し未知の町観察を楽しみながら歩こうと思ったが、駅とその近くの大きな道路沿い以外は住宅しかなく、一度住宅街に入ってしまうと町観察もすぐに飽きてしまった。あとは帰り道で迷わないように目印になるような物を探すことくらいしかやることがない。

こういう時にこそ穂瑞の一人喋りが必要になるのだが、彼女は沈黙の中、まるでそう命じられた機械のようにただ歩いていた。何か話題を振ろうと口を開きかけるが、僅かに丸くなっている穂瑞の背を見た途端それを躊躇った。

通り過ぎる家から聞こえる家庭音をBGMにただ歩く。程よい間隔を保ったまま穂瑞の後ろを歩く。

自分はこんな彼女とromioという謎の人間に一体どんなゲームをやらされるのだろうか。人間、気が乗らない時は総じて静かになるものである。先程まではあんなに饒舌だった彼女が住宅街に入った瞬間から沈黙を続けているのは何かしら『負』の理由があるのだろうか。自分からお願いでお願いしておいて気落ちするとはどういうことだろうか。それなら最初からこちらの都合を無視するような真似はしないで欲しかった。本当なら今日は大人しくゲームの続きを楽しんでいたというのに。

悶々とした気持ちを抱いてから約十分後、穂瑞が歩みを止めた。

「ここがromioさんの家です」

彼女が指さした家は灰色のコンクリート壁で作られた、とても温

かみの感じられない建物だった。建物の高さから推測するに一階しかなさそうだ。家と言うより倉庫と言われた方が納得がいく。けれどアルミ製の新聞紙が溢れた郵便受けの横には確かに誰かが住んでいる証拠である表札が貼り付いていた。木製の表札には『館山』の文字。

「館山さんっていうの？」

「です」

穂瑞はさも当たり前のように鍵を使って玄関のドアを開けた。

中でどんな人物が待っているのだろうかと思像し、やや緊張で身が固くなる。恐る恐る穂瑞の後ろから家の中を覗き込む。そして思わず顔をゆがめた。

入ってすぐ目の前には脱ぎ捨てられた服と出しっぱなしの布団。床に散乱するカップ麺等のゴミ。こんな足の踏み場もないような所に本当に人が住んでいるのか疑ってしまう。これだけでromioという一人の人間の断片が見て取れる。

穂瑞はゴミ屋敷の中を土足で踏み入り、邪魔なゴミを蹴りながら通り道を作っている。彼女は佳耶が通りやすいように気を遣ってくれているのだろうが、佳耶の本能は家に入ること自体を拒否しつつあった。中から漂ってくる臭いだけで気分が悪くなりそうだった。

「佳耶ちゃんどうしたのですか？ ささ、入ってくださいです」

警戒心のない小動物の様なきよんとした顔の穂瑞に腕を掴まれ、逃げられないと悟る。彼女に身を任せ土足で畳の上をゴミを避けながら歩く。

いざ中に入ってみると、状態は更に悪かった。開きっぱなしの背の低いタンスからは服の袖が力なく出ており、台所には洗った様子のない汚れた鍋や食器が山積みになっていた。こんな光景は漫画やゲームの中で見ただけのことがない。フィクションの中でしか存在しない空間だと思っていたものが目の前に広がっている。これはきつと何かのイベントなんだと思ひ込みたくなる。

「佳耶ちゃん、この下にromioさんがいるのです」

床に不自然な暗い空間がぼつかりと開いていた。台所のすぐ側という位置関係から推測するに床下ユニットだろう。だがそこは収納スペースとしては使われていないようだ。普通の家庭にはまずあり得ない木製の階段が下に向かって伸びている。

「降りるの？」

冗談半分で尋ねると、穂瑞はこくりと首を縦に動かした。「冗談じゃない。」

階段の先は暗くてどうなっているのかよく見えない。何が待ち構えているのかわからない怖さを感じ、息を呑む。ダンジョンRPGのキャラクターの気分だ。彼らも最初の冒険の時はこんな気持ちなのだろう。それなら画面の向こうでコントローラーを握りながらわくわくしていることを申し訳なく思う。

いつまでも動かない佳耶を余所に、穂瑞は階段をテンポ良く下りていく。佳耶も意を決して階段を下りる。手すりもなく、足下が暗くて見えない階段を慎重に一步一步踏む。多少度胸があると自負していたが、今は穂瑞の姿を見失わないよう注意することに必死だった。少しでも見えなくなれば、怖がって立ちすくんだ格好悪い姿を見せることになりかねない。悔しいが現状を保つには穂瑞の存在が不可欠だ。

やがて下の方からぼんやりと淡い光が見えてくる。それを捉えた佳耶の恐怖心も光の強さに反比例するように薄れていく。

階段を全て下りた先には電球に照らされた木の扉しかなかった。その何の変哲もない扉はどこか禍々しい空気を醸し出していた。佳耶の全身を鳥肌がネズミのように素早く体中を走る。また佳耶の本能がこの先に行くことを拒否しようとしていた。

「おじさん、佳耶ちゃんを連れてきたのです」

穂瑞は二回扉を叩いてから向こうからの返事を待たずに躊躇いもなく扉を開けた。一方、心の準備がまだ出来ていなかった佳耶は「ちよつと待って」と言いかけたが、言葉が喉に張り付いて出てこなかった。

全開になった扉の先からカタカタとキーボードを叩く音が聞こえる。穂瑞に促され、地下室と言うべき部屋に足を踏み入れる。

白い蛍光灯に照らされたコンクリート壁の部屋だ。佳耶はその部屋に置かれている物を見張った。

映画館のスクリーンを思わせる巨大なモニターが壁の三分の二を占領している。更に巨大モニターの下にはいくつもパソコンのモニターが設置されており、それぞれのモニターに全く違う何かが映し出されていた。

そのモニターの前に髪を後ろで束ねた人物が椅子に座って熱心にキーボードを叩いている。くたびれたシャツに色あせたジーンズ。とてもこれから人と会うような格好ではない。

「おじさん、連れてきたのですよ！」

再び穂瑞が大声で言うのと、その人物は手をぴたりと止め、椅子ごとゆっくりとこちらに体を向けた。

佳耶を見るなりその人物は、フレームのない眼鏡の奥の細い目を光らせ、無精ひげが残る口元を上げて妙な笑みを浮かべた。

「やあ、よく来てくれたね。ギャルゲーマーのカヤッチさん……改め、葉鍵佳耶さん」

男はゆっくり口を開いた。

「あなたが、romioさんですか？」

佳耶は声を絞り出して男に尋ねた。ゲームでありそうな展開に胸の鼓動が早くなる。

男は表情を少しも変えずまた口を開いた。

「自己紹介させてもらうよ。僕は館山口ミオ。嘘っぱいけどロミオは本名だよ。そして、そこにいる乙波穂瑞の叔父だ」

館山口ミオの言葉に思わず穂瑞の方を見てしまう。関係者を通り越して血縁者だとは言われるまで考えもしなかった。

「ちなみにおじさんは三十七歳の独身なのです」

「余計なことは言わなくていい」

穂瑞は頬を膨らませると、部屋の隅に置かれているソファに座

った。足を大きく前に投げ出し、腕を天井に向かって高く伸ばし、リラックスしている。

彼女に付いて行くべきか迷っていると、ロミオが椅子から立ち上がり、こちらに向かってきた。痩せ型で猫背。一見迫力はないが背が高く、いざ目の前に立たれると圧倒されてしまう。

「なにか飲む？」

「結構です」

一階の台所風景が頭を過ぎり、反射的に断ってしまう。

「そうかい」

ロミオは眼鏡を外し、シャツでレンズを拭き、また元の位置に戻す。

「君はどうしてここに呼ばれたと思う？」

「乙波さんに頼まれたからと……掲示板でのあなたの書き込みのせいかと」

「うん。その通りだ。僕は例の掲示板にromioという名前で君に対して書き込みをした。そして、穂瑞に君を連れてくるように言った」

佳耶は彼の言葉に引っかけりを感じた。時系列が矛盾している。

romioの書き込みを見たのは穂瑞と出会った日の夜だ。

「最初の書き込みは何故か消されてしまっただね。新たに書き込んだ内容を見たんだと思うよ」

「そういえば、その日の朝わたしの友達が変な書き込みがあったと騒いでました」

「どちらも内容は変わらないがね」

「わたしに自作の乙女ゲームをやって欲しい、というものですか」

ロミオは一度頷いて再びモニター前の椅子に腰掛けた。

「君は『ゲーム』をどう考える？」

妙な質問だ。ゲームはゲームだ。他の何物でもない。それが正しい答えだと思っただが、彼の細い目は真剣そのもので、そう言っているのか惑わされる。頭を素早く回転させて自分なりのゲームのあ



り方を考えるが上手くまとまらない。

「最近のゲームは自由度が高いと言われるが、僕はそう思わない」  
先に口を開いたのはロミオの方だった。

「自由と言っても所詮ゲームだ。ゲームはプログラムされた通りにしか動かない。つまり、プレイヤーが自由だと思っているものは既に用意された何万通りのシステムの一つに過ぎないんだよ。ゲームはレールの上しか走れない電車と一緒に。ゲームに自由なんてないんだ」

確かにその通りだと佳耶は納得した。何本か『自由度』を謳っているゲームを持っているが、どれも出来ることに限界がある。けれどもそんな限界を感じさせないほど他のゲームに比べて出来ることが多い。だから『自由度』の高いゲームだと思っていた。少なくともロミオのこの言葉を聞くまでは。

「その『自由度』と今回の件は何か関係があるんですか？」

「あるんだよ。大いに」

ロミオは口の端を上げて怪しげな笑みを浮かべている。

「僕は作ることが出来たんだよ。本当の『自由』を体験できるゲームをね」

それが本当なら彼は天才だ。ゲーム業界の頂点に立つ権利がある。しかしこんな地下室で一人細々とゲームを作るような人の言っていることなど信用できない。虚言だったらすぐにでも病院に連れて行くべきだ。

佳耶の疑いの視線など気にする様子もなく、彼はキーボードを叩き始めた。すると数秒も経たない内に巨大モニターに人の形と思われるシルエットが映し出される。

「君にそのゲームのテスターをして欲しい」

モニターに釘付けになっている佳耶の耳朶にロミオの低い声が響いた。

佳耶と謎の二人 - 10 (前書き)

この物語はフィクションです。

登場人物、場所、出来事はすべて架空のものです。

二次元の人間は三次元では存在しません。

ロミオ渾身の処女作『ときめきレボリューション』。ゲームジャンルは乙女ゲーム。大まかなストーリー、攻略キャラクターは乙女ゲームに詳しい穂瑞の監修のもと作成。ゲームはロミオがこだわりにこだわった『自由度』を重視した謎のシステムによって進められ、プレイヤーの行動次第でストーリーから攻略キャラクターまで予測不可能な展開になるらしい。その謎のシステムについて尋ねると「君はゲームをやる時いちいち使われているプログラム言語だのコードだの考えてやらないだろ？」

と、肝心なところを濁されてしまう。

仕方なく佳耶はもう一つの重要事項を尋ねる。

「それで、どうしてテストプレイヤーにわたしを選んだんですか？乙女ゲームならそちらに詳しい方にプレイしてもらったほうがいいと思います。例えば」

佳耶はソファアでくつろいでいる穂瑞を指さした。女の子が攻略キャラクターのギャルゲーばかりやっている自分よりも、乙女ゲームに対して大いなる愛を抱いている穂瑞の方がよっぽどの仕事は適任だ。ましてや、佳耶は乙女ゲームのパッケージを見ただけで嫌悪感を抱いてしまった。そんな自分にはテストプレイヤーの資格などない。佳耶はロミオにそう力説するが、ロミオに加え遠くの穂瑞も大きなため息をついた。

「やっってもらったよ。穂瑞だけじゃなくて何十人もの自称・乙女ゲームにも」

「でも、誰もクリアできなかったのです……」

静まり返った地下室に機械から漏れる低音だけが反響する。

浮かぬ顔の二人に告げられた事実佳耶も言葉をなくした。

『誰もクリアできない』ゲームなどバグまみれのゲームを除けば存在しないはずだ。どんなものでも絶対に誰か一人はクリアできる。

例えば制作者やデバッガー。彼らがクリアしなければゲームはゲームとして世に出ることが出来ない。その制作者とデバッガーどちらもクリア不可能だったと彼らは言うのだ。

「バグですか？」

「いや、バグはないよ。何度もテストしたからね」

「でも誰もクリアできなかったんですよね？」

「そうだね、誰もね。みんないいところまではいくんだけどね、どうもクリアだけは出来ないんだよ」

「ちなみにゲームの『クリア』はなにをもって『クリア』なんですか？」

「普通の一般市場で出回っている恋愛ゲームと一緒にだよ。攻略対象に告白して成功する、或いは告白されればクリア。ハッピーエンドだよ」

それなら尚更クリア不可能ということの方があり得ない。佳耶は過去何作もギャルゲーをやってきたが、一度としてクリアできなかったということはなかった。パラメータが必要なものなら全てのパラメータを限界まで上げてしまえば勝手に条件が揃う。アドベンチャー形式ならば途中の選択肢を総当たりすればいずれエンディングに辿り着ける。それ以外のものでも適当にやっていれば必ずクリアは出来る。恋愛をすることを目的としたゲームは、自分のレベルが上がったら敵のレベルも上がるRPGに比べたら天と地の差と云っていい程簡単だ。

今、巨大モニターに映し出されているシルエツトがゲームの進行を妨げる要因の一つなのだろうか。佳耶はじつとモニターを見つめる。

「おじさんの作ったゲームは普通のゲームとは違うのです。パラメータが必要な訳でもなければ選択肢で話が進むわけでもないのです。相手の好みの嗜好をしたり、作業的にデートに誘っても無理なのです。このゲームは――」

「限りなく『リアル』に近いんだよ」

穂瑞の言葉を遮り、再びロミオが意味深なことを口にした。

「『リアル』というのはわたし達のいる現実世界という意味の『リアル』ですか？」

「ゲームの世界を『バーチャル』。僕らがいる世界を『リアル』と分けるのなら意味はそれで合ってるよ。僕の作ったゲームの世界は、僕らのいる現実世界とほぼ一緒なんだ」

「ますますわかりません」

話している内容の方がフィクションに思えてくる。

「このゲームに必要なものは『リアル』で必要とされているものと全く一緒ということなのです」

弾みをつけてソファーから立ち上がった穂瑞は佳耶の隣に立ち、巨大モニターに目を移した。

「だからあたしは絶対に……」

籠もった声で穂瑞が呟く。最後の方は何を言っているのか佳耶には聞き取れなかった。

「もう一度聞きます。わたしをプレイヤーに選んだ理由はなんですか？」

声を少し低くし、最後の質問をした。妄想話と言っても過言ではないものを聞かされ、佳耶は苛立っていた。ロミオを睨みつけ、その回答を待つ。回答次第では即帰ると既に心の中では決めている。

一度した約束は守る主義だが、そんなことはもうどうでもいい。一分一秒でも速くこの場から立ち去ることが出来ればそれでいい。

ロミオはもう一度眼鏡をシャツで拭いてかけ直した。

「その手のプロ達が駄目なら、次に考える手は一つだ。素人にやってもらう。だが、ただの素人じゃ駄目だ。畑違いのプロにやって欲しいんだ。一軍野球選手にサッカーをやらせるようなものだと言えはわかりやすいかな」

例えのせいで余計わかりにくくなっている。

「要は全くそれについて知識のない人間にやってもらった方が、こちらでも予測不可能な行動に出る率が高くて、よりいいデータが取れ

るということだよ」

この回答に対し、佳耶は即座に判断を下した。「帰ります。それはわたしじゃなくても出来ることだと思いますので」

佳耶が踵を返し出口に向かおうとすると、突然穂瑞がすぎるように彼女の腰に腕を回し、それを制してきた。このまま穂瑞を引きずって帰っても構わないと思ったが、思いの外彼女の体重が邪魔をしてなかなか前に進めない。

「か、佳耶ちゃん帰らないでくださいです！」

「帰る！ 畑違いのテストプレイヤーを探してるなら他をあたって！」

穂瑞の両腕は強力な磁石のようにくっついており、はずそうとしてもびくともしない。苛立ちで手を挙げそうになるが、相手は女の子なので暴力だけは振るいたくはない。なんとか引き剥がそうと必死になる。

「どうしてもギャルゲーに頼みたいなら男性に頼んだ方が早いと思いますよ。彼らの方がわたしよりもプレイしたゲームの数は多いはずですから！」

「あー……そう、男性、ね……うん、男性」

ロミオの歯切れのない返事に余計苛立ちがつのる。

「どうして男性をターゲットにしなかつたんですか!?!」

「いや、だって、乙女ゲームだし。男を攻略するゲームを男にやらせてもいいデータは取れそうにないし。まあ、そっちの気がある人だったらわからないけど。でも僕はそっちの人と二人きりになるのはちょっと遠慮したいかな」

彼の暢気な空笑いに佳耶は力が抜ける。穂瑞の妨害に抵抗する気すら失せてしまった。

この姪あればこの叔父あり。どう頑張ってもこの二人の呪縛から逃れることは出来なさそうだ。逃げたところで彼らなら地の果てまで追いかけてきそうだ。自分が疲れるだけで何も面白くない。佳耶

は強く拳を握り、心の中で自分のモットーを繰り返して自身に言い聞かせる。

「やってくれたらそれ相応のお礼はするつもりだよ。クリアできてもできなくてもね」

「これ一作やってくれるって佳耶ちゃん約束してくれましたよね！？」  
「お願いなのです！」

諦めると決めた。腹を括ると決めた。

佳耶はゆっくり振り返り、ロミオに向かって拳を突き出し

「葉鍵佳耶、一度した約束は必ず守ります！　ただし、プレイヤー回につき三万円のアルバイト料をいただきます。無償で働くデバッグはしませんから」

強く決意を言い放った。

アルバイト代として三万円を提示したのは思いつきだった。特に意味はない。ただ無償でこの二人に付き合っるのは癪に障る。相手側も成功しようがしまいがお礼をしようと云っているのだからこれを断る理由はない。真っ先に頭に浮かんだのがアルバイト代だった。多欲が出ているかもしれないが、これから自分がやらされることを考えれば妥当だと佳耶は思った。更に、終わったらそのお金で新しいゲームを買えば少しは気がおさまるというものだ。

ロミオは細い目を目一杯見開いてからすぐに元の細さに戻し、ふつと笑みをこぼした。

「交渉成立、かな？」

彼の質問に静かに頷いた。

すると下半身が一気に重くなり、倒れそうになった。佳耶の下でぺたんとコンクリートの床に座り込んだ穂瑞の仕業だ。彼女はまだ腰から腕を退けようとしない。それどころか一層力が強くなっている。

「佳耶ちゃんはやっぱり優しい人なのです！　頼んで本当によかったのです！」

嬉しさのあまり泣きじゃくる穂瑞にソファで休むよう促すと、

彼女は素直に従ってソファに座った。

やっと身軽になった佳耶はロミオの側に移動し、モニターに目をやる。

「それで、どうやってゲームを始めるんですか？」

穂瑞と同じく、嬉しそうな表情のロミオは席を立ち、今まで自分が座っていた椅子を指さすジェスチャーをした。佳耶はそれを『座れ』という意味だと解釈し、そこに腰を下ろす。

「まずはゲーム上の君を作る」

佳耶の後ろに立つロミオはキーボードと目の前の液晶モニターを指して手順の説明を始める。

このゲームを始める前に必ずやらなければならないのが、プレイヤーキャラクター作りらしく、このゲームで最も作業に時間が掛かるらしい。時間が掛かるというのはシステムのレスポンスが悪いのではなく、キャラクターメイキングに一度嵌ってしまうと細かいところまで懲りたくなるからだど、ロミオは笑いながら言う。

「モンモンみたいなものですか」

『モンスター×モンスター』をはじめとする大人数参加型ゲームや、古き良き時代から受け継がれているダンジョンRPGと同じだ。自分でキャラクターを作らなければ話が始まらない。もう一つの共通点を挙げるとすれば、全てあらかじめ用意されたパーツの組み合わせによってキャラクターの個性が出る。プレイヤーの好みのキャラクターを作ることと他人との差別化と、ゲームにより入り込み易くするという効果出すのに一役買っている。

佳耶はロミオの指示に従い自分の分身作りを開始する。

まずは名前を決める。キャラクターの名前を考えるのは苦手で、いつもプレイヤーキャラクターの名前はデフォルト名か自分の名前を使用している。ただ、今回は普通のゲームと違い恋愛ゲームなので、自分の名前を使うべきか悩む。デフォルト名はないのかと彼に尋ねると、特に決めていないと返される。恋愛ゲームのキャラクターには必ずデフォルト名があるものと思っていた佳耶にとってこれ



は最初の難関だった。

既存のキャラクター名を使うというのも手だが、自分の好きな女の子の名前を無断で使用するだけではなく、主人公以外の男と恋愛させることに抵抗を感じる。ヒロイン達はいるべきゲームの中にいるからこそ輝いているのだ。

散々悩んだ挙げ句、結局『葉鍵佳耶』と名前欄に打ち込んだ。

次に誕生日、血液型、身長、体重などのプロフィールを決める。

誕生日や血液型など知られても差し支えないものに関しては自分のものを入力し、身長、体重だけは一番気に入っているヒロインのものを拝借した。今これを打ち込んでいる後ろでロミオがどんな顔をしているのか佳耶は気になったが、見ないことにした。プロフィールに嘘を書き込むことくらい誰でも一度はやるだろう。

そして次にキャラクターの容姿を決める。

「ここが一番時間が掛かるところなんだよ」

楽しそうにロミオは容姿を決めるのに必要なパーツの話始める。決められるパーツの部位は頭、輪郭、眉毛、目、鼻、口、体の七つ。それを更に細かく分類する。例えば頭なら前髪と後ろ髪、更に長さや色、髪型を細かく設定することが出来る。種類もそれぞれ百近いものが用意されており、これを作るだけで一日費やしたプレイヤーマもいる程だと話す。

佳耶は試しにマウスで前髪用パーツをいくつかクリックして、まだ人の形しかしていないキャラクターに付け足してみる。右分け、左分けくらいの違いならいいが、どこが違うのか全く判別出来ないパーツが大半を占めていた。微妙に長かったり、分け目がずれていたりと目を凝らして見なければわからない細かさだ。こんなに必要なかと問いたくなる。

「これは確かに時間が掛かりそうですね」

ずっとモニターを見ていた影響で目が疲れ、目頭を強く押さえて一度小休憩を挟む。

パーツを一つ一つ見ながらキャラクターを考えるよりも、先に考

えたキャラクターに合わせてパーツを探した方が早そうだ。佳耶は背もたれに体を預け、頭の中でキャラクターの容姿を思い浮かべる。髪は長い方がいい。メインヒロインの九割は髪が長くて女の子らしい。色は薄い桃色で、髪型はレースのリボンで髪を少し飾るくらいで丁度いい。顔は丸めで目は大きめ。眉毛は太いより細い方がいい。鼻と口はものによつては省略されているものがあるので想像しにくい。この二つは適当に気に入ったものにすればいいだろう。あとは体型。細いことに越したことはないが、細すぎるのは逆に魅力を削ぐことになる。やはり多少丸みがあつて柔らかい方が惹かれる。「これでいこう」

頭の中で描いた理想像を忘れない内に完成させる為、素早くマウスを動かしてパーツを選択する。数分という短い間に作業は終わり、画面の中には思い描いたとおりの女の子が立っていた。全ての理想を詰め込んで作り上げたヒロインを佳耶はうっとり眺めた。

「凄い凄い、最短記録だ」

後ろからぬつと身を乗り出してロミオがモニターに顔を近づけた。突然視界の一部に男性の顔が入ってきたことで、佳耶は思わず体を強張らせた。

「つ、次は何をすればいいんですか？」

佳耶はモニターから目を逸らして次の行程を聞いた。意識はしていないが、やはり男性がここまで接近してくると緊張してくるもので、少しでも早く離れて欲しいと願う。龍之介の時とは違うが、心臓の動きが急激に速くなり、顔が熱くなる。

「ああ、次はね」

動揺する佳耶の心情など気付く様子を一切見せず、ロミオは次の説明に移ろうとする。先までのように口で言ってくれればいいものを、あるう事が佳耶が手に自分の手を重ね、マウスを操作し始めた。彼の手の動きに合わせて佳耶の手も動く。生まれてから十七年、父親と兄以外の男性に一度も手を握られた経験のない彼女はこのシチュエーションにただ固まるしかなかった。殴る、蹴る、投げる以外

の方法でこの状況から逃れる術を、熱の籠もった頭の中で懸命に考える。しかし、熱で溶けた脳では何も思いつかなかつた。

「ん、聞いている？ ちょっと、もしもし？」

細い目と無精ひげの顔が目の前にあつた。

頭の中が一気に真っ白になり

「げふっ！」

空いていた方の手で思いっきり彼の顔を殴つた。

顔を押さえながら足下でうずくまるロミオの姿を見て佳耶は我に返る。

「す、すみません！ 大丈夫ですか！？」

慌てて彼を殴つた拳を後ろに隠し、ひたすら謝る。怒って帰るよと言われたらどうしようかと心配になる。

「はは、佳耶ちゃんは元気だね」

ロミオは怒るところか、顔を擦りながら満面の笑みをこちらに見せた。ずれた眼鏡を定位置に戻し、「どっこらしょ」の声と一緒に立ち上がった。

「本当にすみませんでした！」

「いいよ、いいよ。これくらいどうってことないよ。昔、気絶するくらい痛いパンチを食らつた身としては、これくらいはまだ可愛いものだよ」

「でも……」

「気にしない、気にしない。次の説明してもいいかな、佳耶ちゃん？」

「あ、はい」

返事をしてから何か違和感に気付く。自分の耳が悪くなければ彼は今

「今、わたしのこと佳耶ちゃんって言いましたか？」

と言つたことを念のため確認する。

「ああ、言つたね。穂瑞がそう呼んでたからね。僕にそう呼ばれるのは御免なさいだったりするかい？」

ロミオは細い目を更に細め、困ったような表情をしている。その顔は、必死にロミオの家に来て欲しいと頼んできた時の穂瑞に似ていた。やはり血縁者だ。

「……す、好きなように呼んでください」

「そうかい。本人の許可が取れて良かったよ佳耶ちゃん」

身内以外の男性に名前を呼ばれるのは初めてだった。ロミオは佳耶に次から次へと『初めて』を与えてくる。このままではゲームをする前に恥ずかしさで倒れてしまうのではと思う程に。音が反響しやすい密室の中で胸の鼓動を聞かれないよう、ゆっくり深呼吸して落ち着かせる。佳耶の不自然な呼吸音が小さく部屋の中に響くが、そんなことをいちいち気にするような余裕はなかった。とにかく、今は心臓の動きが元に戻ればそれでいい。

「それで、次は……なんでしたっけ？」

胸を押さえながらロミオを視界に入れずに尋ねた。

「次はボイス。君のキャラクターの声を決めて欲しいんだ」

モニターには『voice1』という文字と、その横にスピーカのマークが映し出されていた。ロミオにスピーカのマークをクリックするように勧められ、佳耶はそこまでカーソルを動かし、マウスのボタンを押した。すると、モニターから

「こんにちは」

という女の子の声が聞こえてきた。その声は音声合成ソフトで作ったような片言な発音ではなく、生身の人間が話すのと同じ滑らかな発音だった。

「声も百種類ある。その中から気に入った声を選ぶといいよ」

どうやって百種類もの声のサンプリングを集めたのか気になるところだが、聞いたところで彼は教えてくれないだろう。

佳耶は『voice1』から順番に一つずつ声のサンプルを聞く。すっかり静かになった部屋に様々な女の子の

「こんにちは」

という声だけが木霊する。

二十個目を聞いた辺りから段々とこの単純作業が苦痛になってくる。ソファアに座っていた穂瑞も今は耳を塞いで横になっている。その姿に、出来ることなら彼女のよう寝転んで作業したいと佳耶は心底思った。なんとか頼杖を付くだけで我慢する。制作者がすぐ後ろに控えている手前、苦痛を口にすることは躊躇われた。

作業ペースが落ちてから数十分後、『voice67』までの試験が終わる。正直なところ、もう声などなんでもいいと思いはじめた。だが、心の片隅でまだ燃えているゲーマーのプライドが手を止めることを許さなかった。プライドに動かされ、『voice68』のスピーカーのマークをクリックする。

「こんにちは」

優しい少女の声が耳に入る。その声に佳耶は手を止めた。もう一度同じマークをクリックする。

「こんにちは」

少女の声に鼓膜が震えた。

「見つけた。理想の女の子」

自分のプライドに心から感謝する。

「決まったかい？」

ここまでずっと佳耶の作業を見守っていたロミオに肩を叩かれる。大きく頷いて満足していることを伝える。

「それじゃあ、選手交代だ」

佳耶は席から立ち退き、待つてましたとばかりにロミオが勢いよく椅子に座った。そしてキーボードとマウスを目にもとまらぬ速さで動かし始める。モニターには見たこともない英単語の羅列が滝のように流れている映像しか映し出されておらず、何をしているのか見当も付かない。これがロミオの言う『プログラム言語だのコードだの』というものなのだろう。

「最適化完了、と」

ロミオがエンターキーを押すと、全てのモニター画面が真っ黒に変わる。黒い背景に『Loading』の文字が浮かぶ。これから

何が始まるのかと考えると、佳耶の心は少し躍った。新しいゲームが始まる前の数秒間が最も佳耶にとって楽しい時間だ。これからやるゲームが人生で最も遠ざけていたジャンルのゲームだということをお忘れ、巨大モニターに釘付けになる。

『Loading』の文字が表示されてから数秒後、画面が急に明るくなり、中央に『ときめきレボリューション』というきらびやかなロゴが出現した。これをプレイするという使命を背負わされていたことを思い出し、佳耶の中から『楽しみ』の文字が瞬時に消える。

「さて、準備が出来たことだし、佳耶ちゃんの気が変わらない内にやってもらおうかな」

聞いたことのない歌を口ずさみながらロミオが席を離れ、何処かに移動する。

「何処に行くんですか？」

「何処つて？ ああ、ごめん言っただけだったね。ゲームをやる部屋はここじゃないんだ。プレイルームって場所があつてね、そこでやつてもらつたことになつてるんだ」

手招きする彼に付いて行くと、部屋の隅に出入り口とは別の扉を発見した。壁と同じ灰色をしている為、一見しただけでは気付かなかった。

プレイルームと称しているからにはゲーマーにとって快適な環境が作られているのだろう。部屋自体は狭くても構わないが、巨大モニターに長時間プレイに対応したリクライニングチェアは外せない。当然冷暖房完備で、プレイ中に何かつまめるものがあれば尚いい。期待に胸を膨らませ、少し重たい扉を開ける。

「あれ……？」

佳耶の口から間の抜けた声が漏れる。予想以上に狭い部屋の真ん中にリクライニングチェアらしきものが一つ置いてあるだけなのだからそんな声が出てしまうのも当たり前だった。

「ここが」

「プレイルーム」

突きつけられた現実には息を呑む。

「行ってらっしゃいなのです。佳耶ちゃん」

振り向くと笑顔の穂瑞が手を振っていた。何故だか彼女と永遠に会えない気がした。

何処に繋がっているのかわからない配線だらけの床を気をつけながら歩く。まるでSFの一場面を体験しているようだった。

「じゃあ、ここに座って」

意を決して黒革の椅子に座る。座り心地がいいのが今現在唯一の救いだ。

「で、これ被って」

屈んで何をしているのかと思えば、ロミオは椅子の下から得体の知れない物を佳耶に差し出してきた。

スキーで使うゴーグルの様な物にスキーをするのには全く必要のなさそうな装飾が左右対称に付いており、そこから何本もの配線が垂れ下がっている。その形状からますますSFを彷彿させられる。

「なんですか、この怪しい機械は？」

「知らないのかい？ ヘッドマウントディスプレイだよ」

その名前を聞いて佳耶は以前ゲーム専門のイベントで、これを使った最新のゲームの紹介を見たことを思い出す。だがその時見たヘッドマウントディスプレイよりも、目の前に出された物の方が付いている機械が多く、配線も比べものにならない本数だ。

「念のため聞いておきたいのですが、命の安全は守られていますか？」  
恐る恐る尋ねる。

「その点は安心していいよ。何度も僕自身でテストしたし、穂瑞も他の子達も何ともないって言ってたしね」

随分と軽い口調のロミオからヘッドマウントディスプレイを手渡される。思いの外重いので驚いた。こんなものをずっと被っていたら首が痛くなってしまうそうだ。

「被ったら楽な姿勢になって。首が痛くなるから」

佳耶は手元のヘッドマウントディスプレイを見つめる。やると決めたからにはやらなくてはいけない。

「葉鍵佳耶、いきますー!」

気合いの一言を叫び、恐怖を振り払ってヘッドマウントディスプレイを被る。両手をそれから離れた瞬間、引つ張られるように頭が後ろに下がる。首の負担にならないよう頭から足まで全身を椅子に沈み込ませる。

視界が闇に包まれ退けたはずの恐怖心が蘇る。迫り来る恐怖と緊張で心臓の動きが速くなる。

「大丈夫。リラックス、リラックス」

緊張で体温が下がった手にほんのりと温かさを感じ取る。温かいものの正体は見えないが、不思議と心の隅に安心感が生まれ始める。望めるのならゲームが終わるまでの間ずっとこの温かさを感じていたい。手から徐々に全身にかけて緊張の糸が解れていく。いつの間にか椅子の柔らかさを心地よいと思える程リラックスしていた。

「ロミオさん、もう大丈夫です。始めてください」

「うん。頑張つてね佳耶ちゃん」

手の温かさが増していくのを感じながら

「ゲーム開始だ」

ロミオの声と共に、全身が深い谷底へ落ちていくような感覚に襲われた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9630o/>

---

真・乙女ゲーマー佳耶

2010年12月19日23時25分発行